

横光利一没後75年・川端康成没後50年記念

10-1

東方新感覚派合同「今、再び」

近藤 貴弥 編



出藍文庫

目次

植物図鑑 焼場	五
こつず Ewig Wiederkehren	九
ひととせ 青春は瞼の裏に	二三
豆腐屋 天然景色	五三
久我暁 霧の湖	七七
深紅香奈 嘲われた子	八五
七雲結人 梅が香にむかしをとへば	九九
涼名 本居小鈴の日記	一五一
近藤貴弥 水仙の花束	一六九
後書き (近藤貴弥)	一八七

植物図鑑

焼場

その日、藤原妹紅は焼場を訪れた。冬が駆け足で遠ざかり、春がどっしりと近づきつつあった。

焼場にはちょうどその日の葬儀を終えた人里の者たちが集っていた。しいんとした焼場では、ただ木々が爆ぜる音だけが聞こえる。

その冷たく張った焼場で誰かが私にささやくように思われた。

「その日には焼いてほしいんです。あなたの手で」

転生の分まで数えることができれば彼女は自分よりも長い時を生きたはず。それでも自分は自身が彼女よりも年上なのだとどうしても思えない。お互いの背格好などではない。おそらくは身の丈が合っていたとしても、自分と彼女とは目線を合わせられない。自分のさもしさを嘆いた。どこまでも、彼女の運命を哀れんだ。

その日はその日にきっかり訪れる。自分の中で初めて時が溶けた気がした。

あした朝には、私は火を入れるのだ。

夕べには、私は枕を濡らすのだ。

思い出すのは、誰よりも焼場を訪れる機会だけはあったこと。ただ、訪ねることをしなかっただけ。

いや、実際には一度だけであった。

その手前まで行ったが、自分のしでかしたことに怖くなり、後ろを振り返って引き返した。それ以来だ。私が焼場にどうしても行けなくなったのは。

恐れを抱くようになったのはそれだけではない。

私は火を纏う。しかし私は焼け爛れることがない。

私は自分のこの矛盾について常々感じるものがあつた。人を落としたことはあつても人を焼いたことはなかった。野盗に襲われたときでさえ、小火ほやを起こして脅かし逃げるだけで、ついに人を焼き焦がすことはなかった。

彼女のことを憎らしく、そして愛おしく思った。お見通しなのか。

止まっていたのはきつと私の方なのだ。明日を見やる彼女の方ではなく、過去に巡らす自らにまなざしを向けるべきだったのだ。そのことによく気づいた。

もしかしたら、私はようやく自らを焼くことが許されるようになったのかもしれない。
焼場の煙けぶりは東の方へ長く長くたなびいていた。

۱۱۱۶۴۰ Ewig Wiederkehren

二月終わりの濡れ雪と御阿礼の眠りとは、等しい重さでそこに在った。

その間をかき分けるに、天狗の高下駄はあまりに騒々しい音を立てる。しばし開け放たれていた窓の棧に下駄の歯が掛けられた瞬間にだけ、騒々しさは鳴りを潜めた。

「たまには玄関からお入り下さいよ」

「庭からの方がずうっと手っ取り早いでしょうが」

言つて、射命丸文は大きな紙包みで自分の顔を隠す。包みの封を切らずとも、生姜の匂いが鼻を突く。昼日中から寢床に身を横たえていた稗田阿求の眠りを覚まさせるにはその匂いだけで事足りた。

「やはり窓を開けておられた。そろそろそういう頃合いだと解っていました」

「空気を入れ替えるためにね。不躰な鴉天狗はお呼びではないんですが」

わざとらしく唇を尖らせて、文は窓を飛び越える。棧をかまち框の代わりにして、雪を嚙んだ下駄を脱ぐ。一時、ごうと風が吹き、下駄の歯と歯がからから笑った。

「春近いといえど冷える日ですね。火鉢だけでは物足りない。生姜湯でも飲みたくなりま

せんか」

「……ちようどそう思っていたところではありません。察しが良いですね。気持ち悪いくらい」
阿求は、どこか気まずそうに部屋を見渡した。彼女の寢室の内外を隔てる襖は、小指の先ほどかすかに開かれている。その向こうでは幾人かの老人たちが、真剣な面持ちで何かを相談し合っている。稗田の屋敷で、阿求には聞かせられぬような話を。

「客人が来ているので、使用人どもはそちらにかかりきりなのです。それでも構わないですよ。どうせ冬は、私、書き物以外はずっと寝ているばかりなんですから。用があったら手元の鈴を鳴らせば良い」

「それも承知しています。台所、借りますよ」

言うが早いか、文は阿求の返事も待たずに寢室を出て行った。本日会った覚えのない客の姿を見て、何人かの使用人が首を傾げた。老人たちの会議の脇を通り過ぎると、その輪の中心にいる一人の若者と目が合った。どこか退屈そうにしていた彼は、はにかんだ顔で文に礼をする。文もまた、目礼を返した。きりりと濃い眉をした、実直そうな青年だった。

「まったく、大天狗様の派手好きには困ったものですねえ」

「詮無い事を。今に始まった訳でもなし」

犬走権は、引き絞られた水干すいかんの袖で額の汗を拭った。武器庫の中は冬でも奇妙に暖かい。晩冬に陽気が染み出してきたせいで、余計にそう感じるのだろうか。春が来れば、山の天狗たちは守矢の神々からの求めに応じ、御頭の祭祀まつりがために鹿の首を捧げねばならない。来たるべき御狩みかりに向けて武器を整えるのは白狼天狗の仕事だ。弓の弦を張り直す権の水干は、汗のみならず泥にも塗れていた。

最中、「それよりも」と権が文の方を睨んだ。眼光は非難の色を帯びている。皺一つない礼装で埃っぽい武器庫にまで下ってくるような、鴉天狗の不躰さに。庫くらの出入り口で背に光を負いながら、文は一連の作業を眺めていた。

「困ったものなのは文様の方だ。稚児の披露の宴を抜け出してくるとは。五位以上の位階にある者は皆々出席する手筈だと、大天狗様よりのお触れでは？」

「大天狗様ご自慢のお稚児さんと言ったって、どうせいづものように、結界の外から拾ってきた見目の良い子に適当な術なり教え込んだだけなんですから。呼ばれた所で今さら改めて席を温める必要もなし。誰かと無駄話でもしている方が気が楽ですよ。……それとも、宴の席で出るご馳走のおこぼれ目当てでしたか、椀は」

「まあ、多少」

弓の弦に続き、椀は雁股かりまたの鍬やじりを持ち出してきた。彼女は、今度は文を見なかった。わずかに釣り上がった片頬には侮りが浮かんでいる。犬走椀もまた、天狗である以上は傲慢を業としているのである。

「あなたのような跳ね返り者はいずれ笑い者になりましょう。高位の天狗連のような美少年趣味とも違う。白狼天狗が腕白坊主に剣術の真似事を仕込むのとも違う。ただ一つの血筋に——御阿礼の家系にだけ執するというのはどうにも解らない」

文は、何かを嘔み潰すように顎をまぐまぐと動かした。

文箱ふびを開いた途端、蓋に圧迫されていた紙の束がばさりと飛び出た。せき止められていた時間が一気に流れ出したみたいだった。

使用人の老いた白狼天狗が几帳面なおかげで、文の屋敷はいつも小奇麗である。けれど、書斎の中に散らかり出した紙——たくさんしょうのうの書状の束から漂う樟腦の匂いが、生活の実感を薄れさせるほど整頓された部屋に、束の間の人の気配を露わにする。

書状のうち、一番上にあるのを手に取った。果たしてそれは三日ほど前、稗田阿求の屋敷で生姜湯を飲んだ日に預かってきた代物である。

「文さん、これがね、つまり私なんですよ。そうそう他人には見せない、本当の私」
「幻想郷縁起や何かの書き物は、本当の阿求さんでない？」

「あれはよそ行きを着物や草履と同じです。部屋の中のあれこれを、通りに向けて大つぴらに明かしたがる人はいないでしょう」

そう言って渡されたのが件の書状……というよりも、稗田阿求の生活における種々の実感、思想、学問の技術などが雑多に詰め込まれた分厚い原稿とも呼べるものだ。渡された瞬間、文は驚いた顔こそ巧みに作って見せたものの、その日、何かしらの文書を手渡されるであろうとはすでに察しがついていた。そういう風に決まっているのだ。運命と呼ぶべきか、因果と呼ぶべきかは判然としないものの。御阿礼が自身の人生をしたためたためたようなこの文書を見る度に、戯れの関係に終わりが近いと察するのである。

稚児への愛は、一瞬の煌めきへの愛であるべきなのだ。数千年を経てほとんど教範のように化した天狗たちの美意識では、そういう話になっている。

天狗たちの街では、時折、高位の天狗に囲われている人間の稚児とすれ違う。いつか文が見かけた稚児は、少年ながらに良い仕立ての着物や鼈甲の簪、遠くにも匂い立つような白粉で美しく女の装いをさせられ、唇には牡丹色の紅を差していた。主はどこかの店へ用

足しにでも行つたらしく、その間、稚児は手鏡でしきりに自身の顎を眺めていた。髭の跡が気になるらしい。髭の生えた少年は熟れ過ぎた果実であると、天狗の嗜癖者^{しへきしゃ}たちは言っている。おそらく彼も、何か土産を持たされて元いた世界へ帰されるのだらう。そして天狗たちは、気紛れに次の稚児を見つけてはまた囲うのだ。それはもはや文化であると同時に、天狗が天狗でいるための尊大さを高く保ち続ける技術であり、律法でさえあつた。

阿求が自分に遺そうとする原稿に、文は御阿礼の祖を愛した当時を思い出す。そしてまた、虫魚禽獸^{ちゅうぎうきんじゅう}がその習性を幾代にも渡つて受け継ぐように、始まりの御阿礼と同じ生き方を、後代の者たちも受け継いでいると気づいた瞬間の喜びもまた。

若い天狗には珍しくもない冒険は、文の無惨な敗北に終わった。ただ一度でも彼女に「御阿礼の使命から逃れたい」と言わせれば勝ちだったのに。人界の道理に背を向けさせるほどの悦楽を与える事が、天狗が人を飼う愉しみであると思つていたから。けれども御阿礼は何ものも捧げようとはしなかつたし、欲しようともしなかつた。天狗たちの駆使する秘術も数々の秘宝も、ただ文との間に結びつけられたひどく細い交わりに比べれば、ことごと

とく価値に劣る代物でしかないと思つていたのだ。

「私の子孫たちにも、こうして梅の花を頂戴ね。春になったら、こうして梅の花を。あなたはずっと、ずっと生きていますでしょうから」

彼女はただ、着物の胸元に挿した一輪の梅の花だけを悦びとした。近くの木から折り取つたに過ぎない、真つ白な梅の花だけを。それが二人の生涯の契りであり、文にとっては累代だに渡る甘やかな呪いの始まりでもあつた。

未だに自分は、とうに死んでしまった始まりの御阿礼を愛しているのであろう。そこから抜け出せないまま、転生した代々の稗田の嫡流である御阿礼にも接しているのであろう。始まりの御阿礼は、冬の生姜湯を好んでいた。膨大な書状を残して逝つた。白い梅の花を文にだけ解る墓標とした。個人ではなく、個人との約束に基づいてその血筋に執心する事をこそ、天狗たちは奇妙な嗜癖と呼んで憚はばらない。

それならそれで構わないのだ。全ての悦びと同時に、責を負うのも自分自信なのだから。歴代の御阿礼から渡された書状を順番に繙ひもとくと、その文字の一つ一つと、涙ぐんだ文の

視線が、幾度も幾度も接吻をした。

鉄瓶が噴き上げるしゅうしゅうという息は、阿求のみならず文にもかすかな微睡まどろみをもたらず。阿求の方はすでに眠っている。彼女の眠りは年経るごとに深く、また長くなりつつあった。先日託された原稿に朱を入れて見せた文の意地悪さを一頻りひとしき二人で笑い合った後、阿求はほとんど倒れるように寝室に身を預けたのである。枕元に在る文の膝に鼻先を寄せ、て眠る阿求は、母の乳房に吸いつく幼い獣に似ていた。そのような喩えが思い浮かぶくらい、文にとつての阿求はどれほど歳を重ねた所で、奇妙に少女のままにいる。

今日、文は窓からではなく人里を行く乗り合い馬車で稗田の屋敷へとやって来た。春の陽は里へ下るにおいて、少しずつ歩みを早めつつあった。雪はほとんど溶け、路面に泥濘だけ残している。もう三月も中頃である。この時期、大天狗の屋敷の庭には、山一番と称

されるほど見事な白い梅が咲いている。そこから失敬してきた一枝を阿求へ贈るに鴉天狗の黒い翼はあまり無粋に過ぎると思つたから、わざわざ馬車に乗つてきたのだ。轍わだちを跨またいで渡る煩わづらわしさに、今日は奇妙に心が躍つた。

「良い梅を見つけたので持つて来ましたよ。阿求さんの部屋にはどうにも彩りが足りないと思ひましてね」

梅の花を受け取つた阿求は苦笑いするばかりだつたけれど、文の膝に顔をすり寄せて眠り始める頃には、間延びした口ぶりでこんな意味の話をした。

「子供の頃は梅が好きだつたけど、最近になるまで自分の屋敷で植えたり世話をしようとは思わなかつたんです。学問と書記にのみ生きるが御阿礼なら、そのようなものに執心するのは憚ちかられますから。だからずっと、その色だけを目の奥に留めているんですよ。それが私の能力ちからですからね。でも、どうしてでしょう。今年の春は違ひました。未だ少しだけ子供でいても良いような気がしたものだから」

眠気とはにかみの入り混じつた様子のまま、阿求は梅の花を胸元に捧げ持つた。そして

そのまま眠っていた。白く可憐な花は、衰え始めた阿求の頬の肉づきを美しく隠している。文はまた、自らのくり返してきた儀式の如きものを思う。もう何度、歴代の御阿礼へ同じように弔花ちようかを贈ってきた事だろう。二度と叶わない思いの置き所を探すために、一つの血筋へと美々しく飾り立てた欲望を突き立ててきた事だろう。血脈を愛する行為は、命尽きる悲しみを味わわぬのと同義ではない。妖怪もまた不完全であり、時間を巻き戻す方法は持たない。文は、稗田の血が絶え果てた後に自身に訪れる空虚を恐れていた。

寢室の外では———またも長老たちが寄り集まって、忙しなく話し合いを続けている。稗田の血筋と名跡を後世に繋ぐためのだ。前にちらと顔を見交わし合った、あの実直そうな青年の胤たねがもうすぐ阿求の胎はらに植えつけられる。もう時が長くは残されてはいないのである。御阿礼の短命を思えば。阿求の純潔は否応なく彼の物となるだろう。

しかしながら、その血脈に宿った魂は文の物であり続けるだろう。御阿礼の血を使役する人々は、同時に、文の邪恋を叶えるためにのみ存在を許される一塊の畜群ちくぐんでもある。

そう空想する自身の傲慢を、文はそれこそ天狗の本領であると納得しようとした。しかし、

阿求がそんな自分を叱ったりはしないと予想できてしまうのを、少しだけ寂しく思った。そのうちふと思ひ立ち、文は部屋の隅に置いてあつた飾り時計に細工をして、針を止めてしまった。

そしてまた阿求の傍らに戻ると、自身もしばし眠ろうと改めて目を閉じた。時計への悪戯は、確か未だ、御阿礼の子らに対して仕掛けた事はなかつたはずだから。

梅の香りが、心の奥底にまで降り積もっている。この香りが消えるのと、阿求が時計への悪戯に気づくのと、果たしてどちらが早いのか。そればかりは、誰にも見当のつかない未来だった。

ひととせ 青春は臉の裏に

メリーの意識が旅立った。

何らかの奇怪的現象が引き金となり、メリーの意識を誘拐した。残された肉体は冷凍睡眠カプセルで今も眠っている。

——一体、どうして。

大きな謎が、蓮子の胸を苛める。

振り返れば、何一つとして心当たりがない。

大学もその日の講義を終え、学生と教授の身柄を解放した。となれば、大学関係者は各々、家路につくか遊興に耽るかの二つである。

二人は後者であった。

宵の口では喫茶店で提出用レポートを「退治」していた一方、繁華街が隅々までざわめき出した頃になると、二人は動き出した。

「二十時、十五分、……三十秒」

「——来る」

人気のない、大学の一角で、根拠不明の陽炎が佇んでいた。蠟燭のようにゆらゆらと、そして、辻斬りのように息を殺して立っていたその「境界」を、メリーが発見した次第である。「記録開始」

ボイスレコーダーが起動した瞬間、次に記録したのは、メリーが倒れた音と、蓮子の悲鳴であった。

それ以来、メリーの意識は復活しなかった。

そしてその肉体は、アルファベットで『ノー・タッチ』と表記された警告文とともに、冷凍睡眠カプセルの中で眠っていた。

それから、二十年の月日が経った。

時が蓮子とメリーに巨大な断絶を与えた。

社会に取り残された蓮子は、その後も生き続けた。

できるだけ体をあの楽しかった時代のままに。

そう思って、幾つかの工夫をしている。

運動を続けている為か体は元気であるが、それに反比例して心労がたたり白髪が混じるようになった。今は髪色を変化させないナノ・コーティングをしている。喉にもナノ・マシンを浸透させて若さを維持している。

ただそれが、若作りをしている自分を余計にさいなめていた。

(そういえば)

野暮を承知で、蓮子はメリーを見つめた。

彼女の肉体は二十代——女の盛りを留めている。蓮子がその体を見るのは、いつぶりであったか。

道行く男をその気にさせる豊かな胸部に、好事家に愛好される臀部、妊娠をしていない事を証明するくびれた腹部。

そのいずれもが、内側から飛びださんとする若さを湛えながら冷凍されている。

その上、メリーは鼻根目に見ても美人の類だ。

気の置けない、齒に衣着せぬ言い方をすれば「変人」であったから面倒が少なかつただけ

で、彼女がその気になっていれば、自分を守る男の存在には事欠かさなかつたであろう。

まるで、生きる人形のようにであつた。

(確か、そう。温泉にいった時だわ)

秘封倶楽部が結成して間もない頃だつたと記憶している。近場に良いオカルト・スポットがある、と蓮子が言い出した事であつた。

生い茂る木々の天井の下、ザラついたコンクリートで舗装された山道をパンプスで上つた辛い思い出であつた。

そのオチは、かつて信仰の対象となつた大きな岩が有つたとか無かつたとか。確かそんな話であつた筈だ。当然はずれ。

二人の怒声が山彦で響いたのは覚えてる。

みっともない責任の擦り付けあい。

『あの時の自分は若かつた』と振り返るには蓮子は年を取っていないが、申し訳ないと思つていた。

その後は、二人とも自棄になり、歴史ある温泉宿に泊まって豪遊をした。金欠になったので、むしろこちらの方が後悔したのは言うまでもない。

その時に裸の付き合いをしたが、それ以来であった。

科学技術の粋をこらして作られた『人形』であるからこそ、蓮子にしかわからない思い出もある。

しかしその思い出も、冷凍睡眠カプセルによる銀世界で冬眠をしている。

(そういえば)

ふと、気になったのは彼女の指先であった。

郊外の墓場で、墓暴きをした時の事だ。

場所は古の冥界寺。

時は丑三つ時。

平行世界の入り口である「境界」と、それを抑えこむ結界を暴きに言った時である。

墓石を回すと、そこには満開の桜が屏風を作り、散った花びらが一足早い新緑の季節を告

げていた。

桜の並木道が作り出す、一瞬一瞬で変化する香りは、今も二人だけの思い出となっている。

(あれはもう何年も前のこと……)

墓石を暴いた時にできた指の生傷なんてのは数日で治っている。

それでも、整えられた若枝が大寒波に曝されているようにして、眠りについていてるメリーの指を、つい気遣ってしまう。

蓮子が、冷凍睡眠カプセルの特殊硬化ガラスに触れた。

この程度では問題ない。

だが、百近い層を持つ特殊硬化ガラスは、蓮子の気遣いも友愛も全てを拒んだ。

だがそれは、特殊効果ガラスのみである。

『宇宙』は、そして、『科学』は蓮子へ福音を授けた。

「ねえ、メリー。私ね——」

——貴方がどこにいるかわかったの。

○ ○ ○

メリーが冷凍睡眠されて一年。

蓮子は重度の精神病となり、家から出なくなつた。人世とは隔絶された木々が蓮子を迎え入れ、自然生物が関心と無関心を繰り返した。

季節が、三度、巡つた。

快活さを取り戻した蓮子は己のふがいなさを呪い、自傷行為を繰り返した。

そこへ、冷たいノックの音が三回、鳴り響く。

「失礼。ドアは勝手に開けさせてもらったよ。家から出ないとはいえ、鍵もかけないのは不
用心だね」

蓮子はその声の主を知っている。

岡崎夢美教授だ。

言葉に出す事もなく、蓮子はそう認識した。だが返事をするだけの気力はない。

死んだ表情筋はそのままに、陰鬱と顔を動かすだけであった。

「ひどい部屋だ……。『善きサマリア人の法』に則り、少しばかり狼藉を働かせてもらおう」
そんな法律はありもしないし運用も違う。

そんな事を薄ぼんやりと思いながら、蓮子は窓を開けて換気をする岡崎夢見を見ていた。

星が、蓮子の部屋をのぞき込んだ。

「惑星直列。綺麗な状態ではないが、数年に一度の現象だ。あれだけ活発であったキミが見に来ないのも、不思議に思ってたね」

蓮子の耳に、夢見の言葉が入っていない。

ただ、メリーとの楽しかった記憶が、わき水のようにコンコンとわき起こり、傷ついた心を癒していた。

「あの時」のように――。

そして——「いつもの」ようにつぶやいた。

——二十時、十五分、……十秒

夢見が確認をすると、なるほど、確かにその時間である。

(これはどういう事だ?)

蓮子を注視していたが、横目に時計を確認したわけではない。部屋構造上、視界に入つたわけでもない。体内時計の優れた人物であつたとしても、彼女のいう通りの精巧さを持ち合わせているであろうか。

(もしや……天体か!?)

春分や秋分は曆上では『日付』ではあるが、天文学上では『瞬間』である。

『太陽が、地球から見た時の軌道で、この地点に到達した瞬間を春分と定める』
としてるわけだ。

巨大な銀河系を含む地球からの観測は毎年変化している。同じ場所に同じ天体を通る事はごく稀であり、「春分の日」が同じであっても「春分点」は毎年異なる。

蓮子の目は、それを知覚する事ができるのだ。

(そんな事があっても良いのか……)

宇宙から与えられた福音に、夢見が震えた。そして夢見が、彼女らしからぬ発言をした。

「なあ……私に協力しないか？」

夢見の話はこうだ。

『そもそも私たちが活用している時刻とは天体による運動を人間自らの手で都合良く分割したにすぎない。その元となった天体の運動は、惑星と衛星、恒星系、銀河系、あるいは銀河の連なりが、相互に且つ独立して運動している。これは我々が「境界」と呼んでいる平行世界の向こう側でも同じであろう。そこに地面と空が存在している以上、天体として存在し、宇宙がある筈だ。そしてキミの視線というのは、太陽系の地球から観測した宇宙全体を即座

に時刻に換算してしまう。つまり、キミは境界の向こう側の時間も地球時間に換算できるわけだ」

ええと、何をすれば？

という蓮子による目線の訴えへ、夢見は返事をした。

「キミには、今回の件を研究してもらおう」

驚愕が、蓮子の冷え切った心を抱きしめる。

蓮子には夢見の言葉が信じられなかった。

「それは一体……」

「科学的な見地によって考えれば、彼女の意識が喪失された現象が『本当に彼女自身にのみ適当する』かと言われると疑わしい。この世界にも不条理は多くあるが、いずれも、一般化と再現性を持った極ありふれたものだ。今回の彼女に関しては不幸であったが、果たして『本

当に彼女自身にのみ適當する』だろうか」

つまりだ。

「メリーの意識喪失を再現して、その場所の在処を突き止めろ」

そう言っているのであった。

○ ○ ○

「ね？ 酷い言い方でしょう」

冷凍睡眠カプセルに向かつて、蓮子は話を続ける。凍った金髪が御簾のようにかかる耳には、なに一つ響かない言葉である。ただそれでも、武勇伝のようにしてでも、愚痴のようにしてでも、伝えたかった。

「それからはもう大変。近くのT市に行って喫茶店で合言葉を言わないと入れない電器屋さんとか案内されちゃった」

冷凍睡眠カプセルの駆動音だけが、蓮子の話に聞き入っていた。目の前にいるメリーは、眉一つ動かさず、穏やかな寝顔を曝している。

「それで出来たのがね。小さい四輪駆動車よ。中学生がやる夏休みの工作でももうちよっと良いもの作るわよ。『枯れた技術の方が信頼できる』なんて言ってたから、もう大変よ」

蓮子は四輪駆動車をどう説明しようか悩んだ。

簡単なモーターと大きなタイヤに加え、気温や湿度などの各種センサー系を搭載し、四方にはカメラ、最上部には電子式の天体望遠鏡を装備していた。

装備は以上である。

動力源となる電気を始めとして何から何まで全てを有線でつなぎ、蓮子らは境界の向こう側に行かないまま、有線コントロールにて単身突入させて計測する。記録は勝手に取ってくれるのが助かった。

「境界の発生時間や条件の同定作業、平均接続時間がわかったら、いよいよ探査車の突入ってわけ」

蓮子の目が、快活な輝きを取り戻していた。舌の動きも滑らかに、数十年前の研究を報告していく。

彼女の喋りは、青春の輝きを取り戻していた。

「液晶を見るとね。そこには、メリーが意識を失った風景が存在していたの。『同定作業が全部終わったああああ!!』って叫んだわ。夜中の二時に」
でもね、と。

蓮子が同様に切り出す。

「メリーがいたらそのままその場で寝ていたかもしれないわ……」

あの日、あの時、あの開放感。

『秘封倶楽部』が存在していたのであれば、どれだけ行動が変わっていたのだろうか。だが現実には存在しない。どうしても気の抜けない状況下ではそうもいかなかった。何より、作業はそこで終了ではない。

「その次はカレンダー作りよ。といっても、見える時間が限られてるから大変よ」

しかし、だ。

月の傾きから一時間が同定できたのは幸いであつたと記憶しているし、星の並びもほぼ同じであつたのは幸いであつた。

『境界』を挟んだ此方と彼方。

二つの時間を見ながら彼方側のカレンダーを断続的に作っていく。

膨大な時間が、蓮子を求めた。

雨の日も風の日も、境界の条件が揃えば蓮子は境界の向こうを調べていた。

ある日、『異変』が起きた。

「そんな……まさか」

時は秋。

鮮やかな夕暮れが、青みを帯びて暗くなりゆく季節であつた。夜風に寒さが混じった頃である。さそり座が、逃げるようにして視界から消えようとしている時間。

「でも……」

この日は、蓮子と夢見が『大潮』と呼んでいる日であった。境界の接続時間が長くなり、その分、調査時間が長くなる日である。

いつものように電気線を伸ばしてきて、有線探査車を走らせて記録を取り出した時である。その日の「向こう側」は晴れていた。

天体の観測が容易であり、同時に、日本標準時と「境界時間」との比較すら容易である。幾度となくこういう日はあったが、格別に成果の出そうな予感がしていた。

とはいえ、蓮子の想定外のこと起きた。

それが今である。

街頭と液晶の光に邪魔されながら、蓮子が星空を見上げた。

蓮子の瞳が、時間を指し示す。

「二十一時三十四……三十五分」

蓮子が全ての作業を捨てて、境界の向こう側へと飛び込む。

自然そのままの環境が残る「向こう側」では、星の動きがよく見えていた。

時は秋。

鮮やかな夕暮れが、青みを帯びて暗くなりゆく季節であった。夜風に寒さが混じった頃である。さそり座が、逃げるようにして視界から消えようとしている時間。

蓮子の瞳が、時間を指し示す。

「二十一時三十五分……三十六分」

蓮子の肌が、完全に同一であると告げていた。

二つの世界は、完全に同一の時間を示している。

トランプの表裏のように極近しい平行世界であった、と。

蓮子の肌はそう訴えかけていた。

それから数年。

境界向こうのカレンダーと現実世界のカレンダーが完全に——閏日まで含めて完全に同一であると、比較、断定するに至った。

○ ○ ○

蓮子と夢見が「境界」を渡った。

境目となる部分のすぐそばにキャンプ地を設営し、現地にて調査。数日おきに帰宅するという長期計画で動いている。

そう考えていた。

「ふー」

と。蓮子が最初の荷物を置き終えた時、声が響く。

「ごきげんよう」

夢見のような快活な声ではない。それとは全く別の——全身が総毛立つような薄気味悪い声であった。蓮子の瞳には、内情のこもっていない笑顔を張り付けた少女が立っていた。

年の頃は十五、六ほどか。

夜空に瞬く星に勝る金の髪。月夜の光を受けてなお輝く銀の肌。ガラス玉のような瞳は薄

ら笑いを張り付けて、此方を見ていた。

小中学生とも取れる幼い体に、大人顔負けの凄艶な体型をしている。

『大人と子供の境界』が、蓮子を見ていた。

「何でしょう？」

「少し、『お願い』をしたくって」

少女の愛嬌が蓮子の右頬に頬ずりをし、少女の怪しさが蓮子の耳元でささやいた。

「貴方がたのしている事は理解を示しますわ。意識不明の友人と、その原因が『此方』側に
あるのではないかという推察。概ね、間違いないですわ」

ただ、と少女は言葉を続ける。媚びるような仕草が、蓮子の胸騒ぎを大きくする。背筋を
走る冷たさは、背後を漂う人魂によるものか、少女の胡散臭さによるものか。

「貴方がたの活動は、この環境には酷くヨロシクナイので、可能であれば、ここでご帰宅願
おうと思ひまして……」

帰れ、と。

蓮子の耳にはそう聞こえた。その事で、蓮子の怒りが一層、激しくなる。

「そこまでわかっていて帰って欲しい、だなんて言われても、それこそ難しい。見ず知らずとはいえ、誰かが意識不明のまままでいさせて良心の呵責を覚えないのですか？」

数秒考えた後、少女は答えた。

「ではこうしましょう。私が、貴方がたの探している相手の意識を探してくる。貴方がたはここから奥には進まない」

それでよろしくて？

と、張り付けた笑顔を押しつけてきた。

蓮子は納得がいかなかった。相手を信用するだけの理由もないし、確証もない。

一方で蓮子側は目処をつけていた。

「貴方がたが考えている方法は『温度の無い人魂を捕獲』『意識不明の少女を連れてきて接続』という事でしょうね」

驚きが蓮子の心を包み込んだ。計画していたその通りである。

ここの靈魂に温度が存在し、物理的接触をしている事も把握している。

『この世界で生まれた者の靈魂は、低温かつ物理的接触が可能な人魂となる』と仮定した蓮子は、逆説的に、『メリーの意識に温度は無い筈である』と考えた。後は境界の右と左を行き来しながら総当たりの計画であった。

少女の意図が蓮子に絡みついて、耳元でささやいてくる。

「貴方がたの計画に先はありません。いずれ破綻をきたします。ここは一つ、我々に任せていただきますませんか？」

蓮子に刻まれた苦勞の皺が、これからの意志を打ち砕いた。

「……お願いします」

蓮子は言葉を絞り出した。メリーの意識回復という一点を鑑みれば、正体不明の少女に託す方が展望が開けている。

「お互いの窓口を置いておきます。何かあれば、この子に申しつけてください。橙、お願いね」
にゃーん、と。

猫の鳴き声が聞こえた。尻尾が奇妙に太いという違和感があったが、蓮子は飲み込んだ。そして、蓮子は荷物を持って「境界の向こう側」から研究室へと戻った。

それから、半年が経った。

境界を渡った蓮子は目を見開いた。春の陽気が残る月明かりの中であってもわかるほど、色づいていた。

視界中の植物が咲いていた。

蓮子には初めての現象である。可憐な桜の花、力強く咲くアジサイ、背の高いヒマワリ、名も知らぬ香り高い花、女性と肌の白さを競おうとする梨の花、……。

ありとあらゆる花が咲き、どんな絵描きにも作れない、点描画によって作られた風景が周囲に広がっていた。

「何……これは……?」

蓮子が初めて観測する事象であった。

地球は公転と自転を絶えず繰り返す、地軸に沿ってその気候を変化させる。そして植物は、その気候を一身に受けて、自ら過ごした時間の一つの区切りとして花を咲かす。

通常、一年の花が同時に咲く事はあり得ない。

この世界であつたとしても、蓮子が観測してきた数十年間でありえない事象であつた。ひとまず、蓮子は写真撮影を繰り返す。

秋にたそがれるキキョウの隣に、春を彩る桜が咲いている異常事態を数枚、納めた。その時、「にゃーん」

と、猫の鳴き声が聞こえてきた。

蓮子がその方向を振り向くと、猫の隣には、奇妙な少女が隣に立っていた。

日傘を深くかぶって顔を隠してはいるものの、正体不明の慚愧の念は彼女の心身から現れてきている。

「申し訳ございませんわ」

慚愧の念は謝罪へと姿を変えた。

だが蓮子には何を指し示しているのかわからない。ただ、奇妙な——かつ、確かな焦燥感が己の内からわき起こり、今か今かと急かしている。

どういう？

という言葉は、蓮子の口からこぼれる事すら無かった。ただただ、自らが構築してきたありとあらゆる「研究」と青春の全てが、一気に瓦解する恐怖心に怯えていた。

——詳しくは話せませんが

と、少女は事前に断った上で、説明を始めた。

「これは、この土地独特の現象——六十年に一度起きる現象でございます」

「六十年……」

蓮子が知らないわけである。蓮子が「この世界」の研究を初めて、数十年の月日が経っていた。だが、六十年という時間には到達していない。もっと早くに知ればまだ何とか考えようがあったのであろうが、そういう機会にはついで巡り会えなかった。

蓮子の研究者の部分が、心中で『大開花』と仮名をつけた。だが興味の中心はそこではな

い。もっと大事な——人生を捧げるに値する青春が消え去りそうな恐怖感が、蓮子につかず離れず佇立している。

「で、その六十年に一度の現象では、一体、なにが？」

少女が僅かに言いよどんだ。後悔と慚愧が、少女の体を強く強ばらせていたが、少女の内なる強い意志が噤んだ口をこじ開けた。

「あの花は、人間の霊が憑依して咲いたものです」

——それは、どういう。

蓮子の視線が雄弁に物語る。

「そしてそれは、貴方が探しているご友人も巻き込まれてしまいました」

蓮子の視界が暗転した。

○ ○ ○

以後は、蓮子の記憶の片隅に残っている物を集めたものである。

確かな事が三つある。

一つ、友人ことメリーの意識や霊と呼ぶ物は確かにあった。

一つ、しかしそれは、六十年に一度、あの世界を覆う現象に吸収され、広大に咲く花の一つとなってしまった。

一つ、あの花は数日中にしおれてしまい、霊魂は成仏する。

(つまり、メリーは……もう……)

二度と戻ってこないという事だ。

熱病にうなされたような覚束ない足取りのまま、蓮子は家をでた。一体、どこへ向かおうというのか。その行き先は蓮子自身にもわからない。そういえば大学へ行って研究の成果をまとめなければ、とは思っていたが、それもままならない状態である。

気がつけば蓮子は、メリーの眠る冷凍睡眠施設に来ていた。半ば無意識のままに、冷凍睡眠されるメリーのカプセルに来ている。

十代の、若々しい肉体を保ったまま眠りつづけるメリーがいた。

ガラス細工のような瞳は、在りし日の青春を宿しながら眠りにつく。そして、霜のような指先は、かつて手をつないだ暖かみを忘れていた。

だが、メリーが復活することはない。

意識不明の重患は、今やただの凍死した死体となり果てた。

巨大な空虚感が、蓮子の瞳から一条の涙となって這いずりでてきた。認めたくない現実によつて、蓮子の気管が震え、嗚咽すら許さない。

「死」が、高い視座から蓮子を見下ろしていた。同時に、「絶望」が蓮子によりそい、慰めでもすらいる。

蓮子が冷凍睡眠カプセルに体を預けた。

「メリー……待っていてね……一人にはしないから……」

蓮子の脛に浮かぶ、青春の熱い過去。

蓮台野への十字軍的遠征、卯酉新幹線ヒロシゲでのせわしない旅行と冥界参り。カフェテ

ラスで語った、不老不死の薬が作る顕界ネックでも冥界フロアでもある世界エンタジー。廃棄人工衛星トリフネ探索。サナトリウムを出てすぐに行った信州旅行と伊弉諾物質。詳細に纏めた報告書、そしてうらぶれた酒場での怪しげな会談。

互いの目を薄気味悪いと言い合ったのは何時の日か。冥界参りなる不可解な独自の奇習を遊んだのは何処であったか。合成品の洋菓子と珈琲の味はいかなるものか。はたまた、……。

まばゆい青春の光が、蓮子の脳裏で永遠に巡っていた。
そして、目覚めることのない死体が二つ。

〈了〉

豆腐屋 天然景色

膝上の猫のぬくもりに心地よさを覚える。

古明地さとりは白紙の原稿に内から湧き出た心象風景を綴るべく一文字一文字丁寧にペンを動かしていく。膝上で体を預けて寝ているペットの猫を起こさないように、背筋と両足を崩さず執筆をしていた。

さとりは趣味で書いている小説を発刊すべく、物語の最後の場面に向けて伏線の回収を進めている最中であった。

しかし、大事な伏線を綴るペンが遅々として進まない。ペンが進まない間は、猫を撫でてながら思考を巡らせて物語の組み立て直しを図るが、物語が終わりに向かわなければ折角内から湧き出た心象風景が少しずつ色褪せて風化し始めてしまうのである。

物語の終わりが近いと認識が出来るのに、文を進めようと数行綴っては書いた分だけ消したり、前の文の修正を始めたりと物語が前へと進まない状態が続いていた。

さとりはその停滞に苛立ちを覚えて、思わず溜め息を吐いてしまう。膝上の猫が主人の感情の機微を感じ取って遠慮がちに離れる。

「大丈夫よ。あなたのせいじゃないわよ」

膝から降りた猫が彼女から離れる前に一瞥すると、さとりが優しく言った。猫は主人の言葉が分かったのか、尻尾をピンと立てて専用の出入り口から部屋を出て行った。

さとりは自らの能力である「心を読む程度の能力」によって第三の目を通して他者の心を読むことが可能で、会話をしなくても心が読めるため動物相手とも意思疎通が取ることが出来るのだ。反対に対話による意思疎通は、心を読む関係で相手の言いたいことを先に言い当てる、一方的な対話になるため成り立たないことが多い。

人間や妖怪に加えて怨霊までも嫌われている関係で、地霊殿に籠って暮らしており地上に行くことはほとんどない。

「これくらい問題じゃないわ」

僅かに苛立ちを含ませた独り言を呟いた後、再び溜め息を吐く。物語を書く時に必ずと言っていいほど味わう障害。内にある心象風景を表現しきれないもどかしさである。

この障害は一度ぶつかり、なかなか抜け出せず解決まで時間がかかることが多い。時間

に關しては人間よりゆとりのあるさとりにとつて些末なことだが、無駄に悩むのを嫌い休憩を挟むことにした。

自室を出ると地靈殿のラウンジへ向かい、お気に入りの安楽椅子に腰を深く下ろす。苦虫を噛み潰したような顔でこめかみを抑えながら、煮詰まった思考と物語の緊張を解し始めた。目を閉じて視覚の遮断を行い、瞑想をするように集中力の回復を試みる。

安楽椅子のゆつたりとした振り子運動に心地よさに意識が遠くなりかけた時、

——寝たらダメだよ

と、呼びかけるような猫の鳴き声がさとりの耳に届く。さとりは猫の声を一度は無視したが、その後も一定の間隔で鳴くためさとりは否応なしに起きることを余儀なくされる。

「つもう。おやつはまだ早いわよ——」

さとりが洪々目を開けて声のする方へ顔を向けると、これまでの煮詰まった思考が固まるような光景を目の当たりにした。

「あ、お姉ちゃん起きた」と、妹の古明地こいしが猫を抱えながら挨拶する。しかし、さと

りの思考固まらせたのは妹の存在ではなく、こいしと抱えた猫の前に置かれたキャンバスの存在にあった。

「こいし……それ、何をやっているの？」

質問しながら眉間に皺を寄せた。

「これはねー、ペットとお姉ちゃんの絵を描いているんだよ」

「そのペットがあんたの腕に抱かれているけども」

「へへ、今ちようど手を借りてもらってたところなんだ」

楽しそうに答えるこいしの言葉の意味を知ろうと、さとりは椅子から降りてキャンバスに近付いた。キャンバスの絵には、寝苦しそうな表情を浮かべる被写体となった自分が描かれている。そして、膝元にペットの猫と思しき楕円状の塊が鎮座しており、その周りに肉球の判子が様々な色でいくつも押されていた。

一見すると、飼い主とペットの仲睦まじい姿を描いた絵にも見える。しかし、同時に奇妙な点があった。

「ねえ、こいし。絵はこれで完成しているの？」

「え？ そうだよ」

「そう……これも一種の芸術ってことね」

こいしの描いた絵の奇妙な点、それは人物に色が塗られていないことにあった。背景や物とペットの猫に色が塗られているのに対し、人物たるさとりには色が塗られていない。白色で敢えて周囲との差別化のように色を分けるわけでもなく、ただ色が塗られず下書きの線が残ったままの完成とされている。

さとりは、この奇妙な風景を聞くべきか悩んだ。絵に籠められた意図というのは、描いた者にしか分からない。それだけでなく、見た者の内に別の意図を持つ風景として映ることもある。

(もしかしたら偶然かも)

知的好奇心も少なからずあったが、さとりはこいしが持つ独特の表現法と思い、絵に関する問いを胸の中にしてしまっておくことにした。

「他の絵も描いているなら見せて欲しいわ」

「他の絵？ 無くはないけど、今描きたいものがあるんだー」

と、こいしが猫を抱えたまま窓に目線を向ける。さとりも釣られて一緒に窓越しの景色を見るが、旧都が映るだけで何を描きたがっているのか分からなかった。こいしが何を考えられているか、さとりは基本的には分からない。こいしの能力である「無意識を操る程度の能力」によつて、さとりはいいしの心を読むこと出来ないのだ。そも、こいしの第三の目と共に心を閉ざしているためさとりでなくても心を読むことが出来ず、こいし自身も無意識で行動していることが多い。

今回もそんな無意識が働いているのか、こいしの興味は既に別の方向へと向かっていた。

「地上の景色を描きたいの。何度も行ってるし、別に悪さはしないから良いでしょ」

「行く頻度や、悪さをするしないの加減の話の前にやることがあるわよ」

「えー、なんなのー」

「その子の前足に付いた色を取ってあげて」

さとりは、こいしの腕に抱かれた耳を後ろに伏せる猫を指して言った。さとりの第三の目に、猫からの悲哀にも似た解放を求める心の声が読めており、その願いを聞き届けただけである。実際、鳴き喚かないだけでも偉いが、さとりに向ける視線があまりにも達観していてさとりが不憫に思ったのである。

姉妹は絵具の色で何色も重なった猫の肉球の色を落とす最中、

「こんなに色を使ってカラフルな肉球の判子を使って、何を表現したの？」

さとりは思わず知的好奇心を抑えきれずに聞いた。

「うーんと、分かんない」

簡潔な答えだった。無意識とこいしの感性が、絵に不思議な彩りを与えているのだろう。聞いたさとりも明確な理由があるとは思っていなかったため、能力が無くとも経験則からこの回答は読めていた。

黙々と猫の前足を綺麗に洗ってあげた後、猫は一目散にその場を走り去ってしまった。同じような目に遭いたくないためである。猫の姿が見えなくなってしまうから、

「多分」

と、こいしが猫の逃げた先を眺めながら言った。

「お姉ちゃんはいつもペットに囲まれているから、それを思い付いて描いたんだと思うの」
どこまで無意識で本心なのか分からないこいしの発言に、さとりはどう答えるべきか言葉に窮した。こいしの内から湧き出た心象風景がそうさせたと思えば、それで答えが片付きそうではある。しかし、さとりは絵に描かれた自分の姿に色が塗られていないことが気になっていた。

まるで、自身の内にある色褪せて風化しかけている心象風景を見抜かれている気がしてならないのだ。

「あなたにはそう見える……のね」

「どゆことお姉ちゃん？」

「いいえ、何でもないわ。ただの独り言よ」

「私が目の前にいるのに何で話しかけないの？」

いつもながら変なお姉ちゃん、とこいしが首を傾げながら言った後、キャンバスや筆を片付け始める。地上の景色を描きたいという欲求に素直なのだろう。果たして、こいしはさとの様子を気に掛けることなく、絵描き道具一式をまとめて運ぶべく手際よく荷造りをしていった。

その荷造りの様子をさとりは横目に、こいしに同行するべきかどうか悩んでいた。自室で完結を待っている物語、風来坊の如くどこへ行くのか分からない妹の絵描き行脚のどちらが気に掛かるかと言われれば、さとりの関心を含め後者が気掛かりとなっていた。

（あの絵以外に同じ描き方をするのか気になるわ）

人物だけ色を塗らず、周囲の物や背景にだけ色を塗る絵の基準を知りたいのだ。さとりにとって、心の読めない妹の行動を知ることの意味があった。

（それに、こいしの絵を見たら、新たな発想が得られるかも知れない）

実際のところ、自室で何の進展もなく籠っていることに嫌気がして気分転換を行うと決めたのだ。

さとりが深呼吸してこいしと共に地上へと行くことを決めた時、

「さて、あんたが地上に行くなら私も——あつ、ちよつと！」

こいしが既に荷物をまとめて地霊殿を出ようとしていた。さとりが止めなければ、そのまま出ていくくらい準備万端だった。

「なにー？もう地上に行くのに」

こいしの得意とも言える無意識の内に動く癖が出たと言っている。これでも以前に比べて、勝手に出て行ってしまふ頻度は減っているのである。

「私も行くからちよつと待ちなさい」

「お姉ちゃんも来るなら早く来てね。まだ見ぬ景色が私を待ってるのー」

「ああもう、だから早いってば！」

小走りで地霊殿を出ていくこいしに対し、さとりは最低限の外出用の外套だけ羽織って全速力で追いかけていく。しかし、さとりとこいしとでは身体的能力の差があるのか、距離は全く縮まらなかった。こいしが、時折後ろを振り返ってさとりが居ることを確認する程度に

は余裕があった。

一心不乱に妹を追いかける間に、心象風景や描き終えてない物語などの悩みは何処かに落としていた。

地上に出た姉妹は、昼間から行事で賑わっていた人里に来ていた。

街道の公孫樹や紅葉は黄色や赤色に薄く色付き、体を通り抜ける風は爽やかであった。

「すごい、賑わっている！」

「そ、そうね……」

と、さとりは息を切らしながら第三の目を薄目にする。第三の目を薄目にしないと、余計な心を読んでしまい情報過多と集中力の妨げとなつて無意識の内にこいしを見失う可能性があるのだ。

「よいしょつと」とこいしはさどりの疲労を気にすることなく、荷物を背負ったまま人混みをすり抜けていく。さとりは外套の裾をギュッと握りながら、こいしからはぐれないように

後を追う。

人里の街道の店ごとに幟が立てられ、幟には様々な食べ物の名前が書かれておりここぞとばかりに呼び込みの声を響かせていた。

（何の祭りでこんなに騒がしいのかしら、旧地獄の煩さと同じくらい頭に響いて仕方ないわ）
さとりは騒がしさに辟易しながら、人混みをスイスイと進むこいしの動きを注視し続けていた。時折店の品物を物色することもあるが、能力の関係で店員の目の前に立っていても気付かれることはない。幸い、無意識を操って盗みを働かない点に関しては姉として安心して見ていられた。

活気に沸く街道の進んでいると、人だかりが街道の端に寄っていて道の中央を歩く動物に注目が集まっていた。象と駱駝の行脚が行われていたのだ。

「あら、こんなところでお目にかかるとはね」

地霊殿で飼っているために、そこまで物珍しさを感じないさとりだが、地上で見る分には珍しいことには間違いはない。

その珍しさからか、こいしも人だかりを抜けて象の後ろで絵を描こうと荷解きを始めました。無論、無意識の内に行われているだけにさとり以外の者はその行動に気付かない。

「ちよ、ちよつとこいし！ そんなところに居ないでこっちに來なさい！」

さとりは毗を上げて呼ぶが、すっかり絵を描く気であるこいしには届いていなかった。こいしが象に寄ろうとした時、象が歩みを止まる。

ぶわぶわの袋のように垂れ下がった象の尻が一二度揺れると、後ろ足を鳥居のように広げて、尿をした。

「あっ」

こいしは敏捷い動作で道具を持って後ろへ下がる。

さとりは無理やり人混みをかき分けて、こいしを手招きしつつ道端に呼び寄せた。

「びっくりしたー」

「もう、だめじゃない。汚れなかった？」

「うん。それよりあれ見て」

白のキャンバスに尿の滴が掛かって滲んだ円が描かれていた。こいしが象から離れる時に置き去りにした物である。絵筆やイーゼルは後ろへ下がる時に持ってきていたが、これから描くはずだったキャンバスがダメになってしまい、少し残念そうに頬を膨らませて見ている。さとりが、そんなこいしを見て微笑みながら、

「象は絵のデッサンにされるのが恥ずかしかったのよ」

と、読んだ心を教えてあげた。

「そっかあ。私は読めないからね、分からないわ」

「描くには確かに良い題材かも知れないわね。地上では滅多に見ないからね」

「でも、お姉ちゃんのペットで飼っているんだよね。前に見たことがあるもの」

「ええ。それはもちろんよ、あなたのお目付け役には難しかったけども、力自慢だから色んな仕事させたわ。前にいる駱駝もだけど、暑いところに順応出来るからお隣の仕事を手伝うことも出来るのよ。一度に荷物を沢山運べるからね」

「確かにいっぱい持てそうだわ」

こいしが再び置き去りにしたキャンバスを見つめる。予備のキャンバスは持っていて、何も描かずにあのまま捨て置くのがもつたないかも知れない。

雰囲気を感じたさとりは、滴が掛かったキャンバスを洗えば再利用できると考え、伝えよう。こいしの肩を叩く。

「ねえ、あのキャンバスを洗えばまた使えるんじゃない？」

こいしは、さどりの提案を聞いて一拍遅れて頷く。

「使えるかも……でも」

「でも？」

「キャンバス拾ってるお姉ちゃんと象を入れて描きたいな」

「え」

困惑。

予想とは違う返答にさとりは、思わず天を仰いでしまう。

「こいし、あんたの描きたいものが全く見えなけども」

さとの困惑は気にする様子もなく、こいしは他のキャンバスを準備していた。

「いいのが思い付いたのー。見たらお姉ちゃんも気に入るから。ねー」

「もうちょっと人が動いてからね」

と、さとは象に対してしゃくりあげて言った。その後、まるでさとの指示を聞いたかのように象がゆっくりと動き出す。

駱駝と象が街道を進むと、見物客もそれを追い掛けるようにゆっくりと列を成していく。さとはその光景とこいしを交互に見て、少しだけ苦笑を浮かべた。

人里に流れる川でキャンバスを洗い終えた後、こいしがしきりに構図を探すように橋を行ったり来たりしている。

さとは、初めてこいしが絵を描くまでの姿を眺める。が、想像していた状況よりのんびりとしており、日の光が沈みつつあった。

既に駱駝と象の行列はさとり達が居る橋を通り人里を抜けていた。寺のある方角から鐘の

音が僅かに鳴っている。

(こいしもああやって閃くのを待つ性質なのかしら。だとしたらちよつと面白いわね)

さとりが洗った真つ白なキャンバスをしみじみと見ながら考えていた。さとりも物語の筆が止まった時は、猫を撫でて思考の整理をすることがあるため、存外似た者姉妹なのかも知れない。こいしも同様に真つ白のキャンバスと橋からの眺めを交互に見ていた。橋の欄干を叩いたり川を覗き込んだりと、やや忙しない様子で何かを待っていた。

いくら能力で他者からほとんど感知されないとはいえ、さとりが気にするほど周囲を彷徨う妹に何をしているのか聞きたくなるものである。

「ねえ、こいし」

「うん?」

こいしが露店で買った瓶ラムネを飲み干してから反応する。無邪気な顔をさとりに向けてると、僅かに日の光が横顔に差した。

「どうしたのお姉ちゃん?」

「結構長い間ここで景色を眺めているけど、さつき言ってた絵は描かないの？」

「お姉ちゃんと象ことなら描くよ。だけどね、待ってるの。私の好きな時間が来るのを」

「好きな時間？」

「そう、天然の色をいっぱい見ることが出来る時間をね」

こいしが自信満々に言う。天然の色という言葉の意味が分からないさとりは、ただただこいしが楽しそうにしていること自体を楽しむことにした。さとりにとって、地上は騒がしく気の休まらない場所ばかりで、出来れば余程の理由がない限りは行きたくない地域でもある。たまに博麗神社を訪れることがあるが、それはペットの猫の行動範囲となつていてという理由以外には無い。

地上の景色に飽きてきたさとりは、頭の片隅で終わりを待つ物語の存在と、色褪せて風化した心象風景の回収をしようと思案を巡らす。さとりが最初に気にしていた問題だけに、根強く存在しているのだ。

（伏線の再考をどれだけ出来るのかにもあるわね。私の目指していた描写と風景になつてい

れば良いけども)

橋の欄干にもたれかかって一人で考えに耽っていた。その時、

「あ、来た来た。今が良いかも」

「うわ！」

こいしがさどりの眼前まで迫って声をかける。驚いたさどりはのけぞった勢いで橋から落ちそうになるが、こいしが故意か偶然か分からない勢いで手を掴んで戻す。そして、掴んだ手に足元に置いていたキャンバスを渡される。

「ここに立って！ そしたらキャンバスを抱くように持って私に向けてて！」

「こ、こう？ この状態でどうするの？」

「取り敢えず持ったままで！ 出来たら自然に持っててねー」

こいしの指示通り、さどりはキャンバスを両手で持ってこいしに向かって絵を描く姿を見つめる。下書きなしで絵の具を直接キャンバスに塗り、こいしだけの心象風景を現出させようと奮闘していた。どれだけ時間が掛かるかは考えなかった。妹が楽しそうに絵を描く。

その行為がさとりの余計な考えを省かせるのに、それほど時間は掛からなかった。

さとりが背中に当たる日の光を意識し始めた頃、こいしが満足そうな表情で絵筆を置いた。

「あら、出来たのこいし」

「出来たよ！ これは会心の出来になったね」

「どれどれ……」

さとりがキャンバスを持ったまま、完成したこいしの絵を見た時、その光景に思わず息を飲む。

完成した絵は、被写体となったさとりとキャンバスと象が描かれていた。さとりが持っていた白紙のキャンバスに、街道を歩く象とそれを見るさとりが描かれ、背景はさとりの立っていた位置の人里の光景と薄く色付く木々と、街道沿いに生えていた片喰とポーチュラカも色彩細かく描写されている。

しかし、さとりを表す描き方が服や輪郭と顔だけで、またも色だけが塗られていなかった。再び不思議な気分で絵を眺めることになったため、こいしの意図を問いたくなくなってしまふ。

「うーん、やっぱり私ところには色が塗られていないのね。キャンバスの中の方は塗られていたけども……」

「あれ、ダメだった？」

「ダメってわけじゃないわ。ただ、気になるじゃない？色が抜けているなんて」

「それはね、わざとだよ。お姉ちゃんを塗るなんかより光に当てるほうが良いの。ほら」

と、こいしが茜色に変わりつつある太陽とキャンバスの双方を指差して言った。

こいしに言われて、さとりがもう一度キャンバスを見るとちょうど太陽の光が重なり、それがまるで後光のように光が差していた。そしてさとり以外の細やかな色遣いで塗られた部分がより強調されるのだ。

さとりは再び息を呑み、驚嘆していた。色を塗らない意味が悪い意味ではなかったことに。

「……これが私とあんたの言ってた好きな時間ってこと？」

「そうだよ！色んな天然の色が見られるこの時間が好きなのー」

と、こいしがはにかみながら言った。

「お姉ちゃんはなんとなく、色んな色を取り込んでいる気がするの。私の無意識がそうさせるけど、お姉ちゃん嫌だった？」

「いいえ、嫌じゃないわ。むしろありがとうね」

少し涙ぐみつつ、こいしと絵に微笑みを返す。

本来は逆光で絵を見ると全てが暗くなるのに対し、空色で描かれたさとりがそれを相殺しようとする。更に、拾ったキャンバスの中に絵を描くことで、さとりの心は空ではないという表現までしていたのだ。

色褪せて風化した内なる心象風景が別の心象風景に塗り替えられていく。それは、忘却や破棄ではなくさとりの目線の変化と言っている。

「今日はありがとうね、こいし。あなたのお陰で良い景色を見られたわ」

こいしの閉じた第三の目を優しく撫でる。こいしが、少し照れ臭そうに頬を指で搔く

「えへへ、お姉ちゃんが嬉しいなら私も嬉しいよ」

さとりはもう一度、絵と地上の景色の双方を見遣った。どちらも忘れないように、瞼をゆつ

くりと動かして心にその景色を焼き付ける。

いつのまにか落としたのか、真っ白のキャンバスが姉妹の足元で茜色に薄く色付いていた。

〈了〉

久我暁
霧の湖

思い出つてというのは、誰だつて一番夜の思い出が多いんじゃないですか？ 私は、お月様が金色のメダルのようにまん丸になると、霧の湖の畔を飛ぶんです。そんな夜に弾幕ごつこの光弾が、湖の上で煌めいていると最高だと思います。それと、お昼にそんな光景を思い出しながら水の上を飛んでいるだけで、なぜだか胸がワクワクとして、自然と口許に笑みが浮かんでしまうんです。こんな風にちよつとしたことにも楽しめるっていうのは、私だけのものかと思つていました。前にチルノちゃんにこんな話をしたら、分からないつて顔をされたし、他の仲間達からは、妖精らしくないつて言われちゃったんですよね。

でも、ある夕暮れ時のことです。だんだんと月が上ってくるのに合わせるように、とても綺麗な提琴の響きが湖に響き渡りました。私はその音色に導かれるように、湖の畔をふらふらと歩き始めたのです。どうしようもなく寂しさを感じさせる音色でした。まるで小さな子供がお母さんを探して泣きながら歩いているような、そんな光景が瞼の裏に浮かんできます。でもその一方で、どこか暖かい温もりも感じさせてくれる音でした。そして私は三日月の光に照らされて、一心に提琴を奏で続けるあの方を見つけたのでした。私はただ見つめ続けて

いました。提琴の音が止まると、あの人は私に、「どうだったかな？ できれば感想を聞かせてくれるとありがたいんだが」ときこちない微笑みを浮かべてそう言ったのです。私は急に声をかけられてとても驚いたのですが、何とか答えることができました。拙い言葉を紡いで、聴こえている通りのことを伝えられたと思います。そんな私の感想を、あの方はとても喜んでくれました。妖精らしからぬ私の言葉を素敵だと言ってくれたのです。その時私はきつと恋に落ちたのでしょうか。それからただただお話をしたことだけを覚えています。色々な話をしました。特に印象に残っているのは、私の友達の話です。あの方の音色によく似た哀悼精の歌声。あの方はとても楽しそうに聞いてくれたのです。そして、夜を徹して演奏をしてくださいました。夜明け前の冷気に思わずくしゃみが出るくらいまで。そんな私を氣遣って、あの方は演奏を止めてしまいました。もの足りなさそうな私に、「よかったら、また聴いてもらえるかな？」とあの方は言ってくれました。これが、あの方——ルナサ・プリズムリバーさん——との出会いでした。

このことは、他のものにとつてはきつと些細なことなのかもしれません。ですが、私にとつ

てはとても大きなことだったのです。何気なく夜半の湖を浮遊していると、ふとした時に心の中に浮かんできてしまいます。それはきつと、ルナサさんとの出会いの記憶が最も尊いものだからなのでしょう。以前、小鈴さんから作り方を習って、「みじか夜の過ぎゆくままにゆく水のゆほびかなりて流るべらなり」という歌を詠んだことがあります。その歌は、決して上手な歌ではないのですが、それでも何気なく声に出すと胸の奥が熱くなってきました。それは、あの時感じたときめきをそのまま書き付けたからかもしれません。

ところで祭の時期が近づいてくると、今度はどこで歌うのかというような質問をよく受けます。正直、私もよく分かりません。不思議な縁があつて、ルナサさん達の演奏会に参加し、しかもそこで歌うことになって、気がつけば歌姫のような扱さえも受けてしまいました。確かに、あの、音の海の中に浸ることは気持ちよかったです。ルナサさんの鬱の音色だけではありません。メルランさんの躁の音色、リリカさんの幻想の音色も素晴らしいものでした。そして、自分の心のままに歌を歌う。それはそれは素敵なことだったと思います。真つ暗な観客席の中、煌々と輝くステージに一人立った時の息を飲むような緊張感、そして目の前に

広がっていく光の波、観客の熱狂を感じ、一体化していくことの心地よさ、楽曲が理想とする姿へと昇華していくこと、ライブの楽しみというのはまさにそこにあると思います。ただの妖精としてのほほんと暮らしていた私にとって、別世界のような体験でした。そうそう夏の間中、幻想郷を回りライブをしてきて、色々楽しい思い出はたくさんあるのですが、その中でもやはり印象的なのは霧の湖の上でのライブです。霧の湖には、真夏の僅かな時間だけ昼間であっても霧が晴れる日があります。その日を狙って私たちはライブを敢行したので、真夏のじりじりと焼き付けるような日射しの下、汗だくになりながら歌いました。体中の水分が抜け落ちてしまいそうな暑さでした。それでも観客の歓声に応えるように、楽器の音は鳴り響き、その音に導かれるようにして私は声を張り上げました。体中から全てのエネルギーが抜け落ちたように、カラカラになってしまったのを覚えています。そして、全てを出し切った後、チルノちゃんを作った特性の氷室で熱を冷ましました。逆に体が凍えてしまいいそうなほどの冷氣、それが火照った体にはむしろ心地よく感じられたのです。手が悴むほどになって外に出た時のあの開放感ほど気持ちいいものではありません。吹き抜けていく夏風

を全身で感じていると、まるでピチュウった時のような陶酔感を覚えてしまふのでした。あれだけは、やはり他では味わえませんが。夏の湖の上でのライブならではの体験だったように思えます。

私の恋人のルナサさんは騒霊で、かといって名前とは打って変わった落ち着いた方です。そんなルナサさんと湖の周りを散歩することは私にとって大切な時間の一つです。昼間の霧が立ちこめる鬱蒼とした湖も嫌いではないのですが、黄昏時に徐々に黄金から闇色に染まっていく時間が私は好きです。その上、ルナサさんの提琴の響きが加わるのですから、何も言う必要がありません。その晩も、湖の畔でルナサさんの演奏を聴いていると、紅魔館の住人で、門番をやっている紅^{カシ}さんがひょっこりと顔を出しました。これは珍しいことでした。普段であれば、散歩をしている私たちの周りは、ルナサさんの鬱の音色の影響で人気がなくなってしまうのです。抜けているようでいて、実際は実力者という評判は本当だったのでしよう。紅さんは、まったく悲しげな表情をしていません。いえ、むしろ朗らかな、太陽のような笑顔を浮かべて私たちの方に近づいてきたのです。やってきた紅さんは、「二人の時間をお邪

魔して悪いね。ただ今晚しかタイミングがなくてね」などと言うと、私に一輪挿しを手渡してきました。言いながらやってきて、私に一輪挿しを手渡しました。紅魔館の花壇で月見草が咲いたから、お裾分けということなのでしょう。白から淡いピンク色に移り変わっていく花びらが綺麗でした。お札を言おうと紅さんに顔を向けると、いつの間にかいなくなっていました。風のように現れて、風のように消えていく、それは不思議な一夜のお話でした。ですが、私の手の中では月見草が風に揺れています。だから、これはきっと夢ではなく現実なのは間違いないようです。

ふと顔を上げると、霧の湖の向こうで弾幕の花火が上がっています。きっと巫女や魔法使いが暴れていることでしょう。一際大きい赤い光や虹色の弾幕が輝いているところを見ると、どうやら吸血鬼のお姫様も一緒になって弾幕ごっこに勤しんでいるみたいです。そんな当たり前の光景を、私はルナサさんの提琴の音色に揺られながらずっと眺めていたのです。

〈了〉

深紅香奈

嘲われた子

魔理沙をどのような人間に仕立てるかということについて、魔理沙の家では晚餐後毎夜のように議論せられた。またその話が始まった。魔理沙は親の話を他所に、土間の淵に座つてはたき払塵を手に遊んだまま、台所に寄つた小蠅を目で追っている。

「寺子屋の採点正失表を見る限り算術の成績が良いし、店を手伝わせてみようか。もし良さそうなら、将来的には霖之助君のように離れた場所に一店舗構えさせても良からうし。」

そう父親がいうのに母はこう言った。

「人里から出すなんて、とんでもない。妖怪も、皆が霖之助君のようとは限りません。喰われてしまつては何にもなりませんよ。」

「女には縫物でもやらせれば良いよ、縫物を。」

と兄は言った。

「稗田様の家に御奉公へ出せば好いじゃない。礼儀も教えて下さるし、給金も良いし。それに、あそこの着物はどれも良いものだわ。」

そう口を入れたのは、ませた姉である。

「そうだな、それも好いな。廿歳そこそこまで稗田様にお仕えすれば、嫁の貰い手にも困らんだろ。」

と父親は言った。

母親は、何時までも黙っていた。

魔理沙はずっと目で追っていた小蠅が干した茸を積んだ籠に留まるのを待って、音もなく躪り寄ると手にした払塵を振った。幾つかの茸が壊れ、部屋が急に土臭くなった。

「またッ。」と母親は魔理沙を睨んだ。魔理沙は「へへへ」と笑って、髪に飛んだ茸屑を掃った。「少なくとも、八百屋は無理そうね。」

姉がそういうと、父と兄は大きな声で嘲った。魔理沙は胞子を吸ったか大きな嚏をした。涙を啜った鼻先に、先ほどの小蠅が止まった。

その夜である。魔理沙は真暗な涯はてのない荒野で、長い緑の髪を垂らした足のない悪霊に嘲わらわれた。その悪霊は奇抜な背の高い帽子を戴せ、昔に絵本で見た魔女のようであった。魔

理沙は必死に逃げようとするのに、足がどちらへも折れ曲がって正しい屈方が思ひ出せず、ただ汗の流れるばかりで体はもとの道前から動いていなかった。けれどもその悪霊はだんだん魔理沙の方へ近よって来るのは来るが、さて魔理沙をどうしようともせず、何時までたってもただ左右に揺れて嘲うだけだった。何を思つて揺れているのか、魔理沙には一向分からなかった。が、とにかく自分を莫迦にして嘲っているような顔であった。

翌朝、蒲団の上に坐つて薄暗い壁を見詰めていた魔理沙は、昨夜夢の中で逃げようとして藻搔いたときの汗を、まだかいていた。

その日、魔理沙は三度嘲われた。最初は寺子屋の化学の時間で、火に水を掛けると消えるのは何故か訊かれた時に黙っていると、「そうれ見よ。お前はさつきから窓ばかり眺めていたのだ。」と教師に睨まれた。魔理沙の学友は、普段は成績の良い魔理沙が叱られるのを意地悪に嘲つた。確かに魔理沙は、昨夜の夢のことを思い出しながら茫乎ぼんやりしていたので、素直に教師に謝つた。しかし、仮に教師の問いを聞いていたとしても、答えられなかっただろう

とも思った。夢の中で自分の足が動かなかったように、火も水を掛けて消えないことがあるのではないかとばかり気になって、仕方がなかった。

二度目は、寺子屋の帰り路で人形師の業に怪事けちをつけた時だ。七色の人形遣いと名乗るその少女は、さも見事に複数の人形を操って寸劇を観せていた。綿と布で作られた人形が台の上を駆け回るのに、魔理沙は苛立った。其れは夢の中で自由に逃げられなかった自分を思い出しているの八つ当たりである。一通り見終わつた後に、魔理沙は不機嫌に「どうせ種があるに違いない。」と呟くと、人形師は「そうよ。これは人形を操作する魔法を用いているの。」と答えた。魔理沙がそれ見たことか、と思っていると、人形師は「でもね、」と続けた。

「劇の自身は、この人形達が考えているのよ。私は人形達が自由に動けるようにちよつと魔法で手を貸しているだけなの。」

魔理沙はやはり疑った。人形が動くのには何かの仕掛けがあるのだとしても、人形が劇を考えているというのは眉唾だった。

「それは嘘だ。動くのは何かの手品だろうけど、人形は物だから、考えたりはしない。」

「そうね、確かに物が考えるというのは、変な話かもしれないわね。お姉さんが間違っていたわ。」

人形遣いは台を仕舞いながら、魔理沙に優しく謝った。しかしその目は、魔理沙を明らかに嘲っていた。

三度目は、昔に魔理沙の父親の元で修行していた森近霖之助が営む香霖堂へと寄った時だ。店には営業中の看板がでていたが、呼び鈴を鳴らしても返事はなく、魔理沙は仕方なく大声をあげた。

「こうりん、いないの。実家で小蠅が多いから、虫取紙を貰ってくるよう言われて。」

「煩いな。僕は今書き物をしているのだけど。ああ、魔理沙じゃないか。何しに来たんだい。」
「お父さんに言われて、虫取紙を貰いに。」

「それなら右の棚に積んであるから、持って行くと良いよ。」

魔理沙は棚から虫取紙を数枚つかむと鞆の中に乱雑に詰め込んだ。それを静かに眺める霖之助に気づくと、跋が悪そうに、「あの、幾らでしょうか。」と呟いた。魔理沙は父親から、

餘りは駄賃にして良いと二十五文を預かっていた。しかし先ほど人形師に見料として五文を出していたから、今は蝦蟇口の中に二十文しか入ってはいなかった。

「十枚で二十三文。」

魔理沙が俯いて黙っていると、彼は大きな溜息を吐いた。

「僕の師匠でもある親父さんが相場を誤るとは思えないし、さてはここに来るまでに使い込んだな。まあ良いさ、別に高いものでもないし。」

やはり魔理沙は黙っていた。それは彼女の父親が日頃から、ことお金に関しては一切優しくするなど、口喧しく言っていたからだ。父親の弟子である霖之助も、商人として同じ厳格さを持っていると疑わなかった。

「ああ、師匠はお金には厳しかったから、それを気にしているのか。確かに、商人である以上はそうあるべきと思うけれど。僕がやりたかった店は、それとは少し異なっている。幸い、人間ではない僕は多少売上げが少なくても、食うに困ることはないからね。」

そういうと霖之助は、空に向けて嘲った。それが何に対する嘲笑なのか魔理沙には理解で

きなかったが、侮蔑よりも哀れみに近いものであると感じた。だから魔理沙は小さく「ごめんなさい。」と呟いた。お金を払えないことではなく、霖之助の不満に対し謝った。

「気にしていないよ。それでも魔理沙が気にするようなら、そうだな、師匠の顔もあるだろうし、少し仕事を手伝って貰おうか。」

そういうと、彼は赤い茸を一籠と、太い蠟燭を持ってきた。

「紅天狗茸、または蠅取茸ともいう。除虫と夢を見るのに使う茸で、さつき魔理沙にあげた虫取紙の原料だ。これを蠟燭で軽く炙って、紙に汁を塗りつけてくれ。煙を吸うなよ、毒だから。」

言われるままに、魔理沙は作業を繰り返した。そうした紙が二百枚を越えた頃、霖之助はようやく魔理沙を赦し、手を洗っておいでと伝えた。

「剃り遅くなると心配させてしまうから、手を洗ったら帰って良いよ。これに懲りたら、お使い代の使い込みは辞めることだね。それじゃあ、師匠よろしく。」

霖之助に背を押されるように香霖堂を出た魔理沙は、店の裏にある井戸で手を洗った。ふ

と脇を見ると、先ほど嫌と言うほどに見た紅い茸が、苔の上に二本並んで生えていた。魔理沙は霖之助が見ていないか、一度振り返った後に、そのうちの短い方を一本靴の中に仕舞い込み、少し小走りで家に帰った。

それから魔理沙は、一週間を徒に過ごした。この間に魔理沙は、夢の中で見た魔女と三様の嘲りをすっかり忘れていたのだが、それが裏庭の掃除で小さな茸を掃き取った時に、ふと霖之助の言葉と共に思い出された。魔理沙は箒をそのままにこっそり自室に戻ると、靴の中から皺枯れた茸を探し出した。それは傘の一部が破れていたが、それで尚、夢を見るための神秘的な力を宿しているように思えた。魔理沙はまず一口舐め、自分の体に異常が無いことを確かめた。すると口の中に、椎茸を濃くしたような、或いは昆布を煮締めたような舌に纏^{まと}るねっとりとした旨味が広がった。少し前まで、蠅の毒が人にも効くのではないかと怯えた魔理沙だが、苦みが無いことも背を押して一息に飲み込んだ。その後、目を閉じて夢を見ようと努めてみたが、期待ばかり高まって、一向に寝付けない。魔理沙は以前見た夢の内容を

思い出そうと、必死に頭を巡らせた。確か長い髪の毛、変な帽子を戴せた悪霊だった。それが私を見て嘲いながら、ただ近づいて、何もせず、嘲い、浮いて、逃げられず、走った私が、足を。

「おい、魔理沙。箒を放つてどこ行つた。掃除が終わつたのなら、しっかり片付けろ。手前で散らかしていたら世話ないだろうが。」

千切れた思考は、庭から響く父親の怒鳴り声で吹き飛んだ。魔理沙は慌てて鞆を部屋の隅へと投げると、急ぎ庭へと走つた。心臓は鼓膜を叩き、冷たい汗が背中をゆっくり這い上がった。外への廊下は厭に長く、土間は奈落より深かつた。

「ちよつと、厠に寄つていて。」

魔理沙は息を切らしながら「へへへ。」と笑つた。父親は魔理沙に「家の中から出てきて、厠な道理があるか。掃除を早く終わらせて、母さんを手伝ってくれ。」と叱り、魔理沙に箒を押し付けると店に戻つていった。残された魔理沙は、二度三度と箒で地面を清めたが、や

がて箒の柄を杖代わりに身を預け俯いた。早い呼吸を繰り返す口の端から、涎が糸を引いて地面に落ちた。「苦しい、苦しい。」と誰かが言った。魔理沙はそれが、自分が地に押しつけた箒から発せられるように感じた。吃驚して身を躍ると、箒は舞踏ステップを刻んで倒れた。今度は「痛い、痛い。」という声が聞こえた。整わない息を切らしながら魔理沙が徐そりと指先を箒に伸ばすと、箒は地面に張り付いて、魔理沙の手を嫌がった。しかし、箒に手を当てて、魔理沙の体温が箒に十分浸みた頃には、今度は箒は魔理沙の一部であり、自ら地面を蹴って飛び上がった。その勢いで、魔理沙は一瞬だけ、空を飛んだようにも感じられた。それと同時に、臀部の鈍い痛みが小石に尻餅をついたことを教えていた。

「こんな莫迦があるものか。」

魔理沙が箒を怒鳴りつけると、箒は当然知らん顔を決め込んだ。「莫迦はお前じゃないか。」と、木陰で誰かが罵った。そこには、長い緑の髪の毛の悪霊が、魔理沙を指さし嘲っていた。驚いた魔理沙は必死に逃げようとするのに、足がどちらへも折れ曲がって正しい屈方が思いつかず、ただ汗の流れるばかりで体はもとの庭から動いていなかった。木陰からこちらに近寄っ

てきた悪霊は、魔理沙の持つ箒を指して「足が動かないのなら、箒で飛んで逃げれば良いじゃないか。」と言った。

「箒が飛ぶものか。そんなものは子供でも知っている。」

魔理沙が勇気を出して言い返すと、悪霊は身を揺らしながら嘲った。

「だからお前は、学友に嘲われたのだ。知っている事は正しいと、知らないことは間違いと嘯くから、お前たちは嘲われるのだ。お前が何を知っている。箒に飛べるか尋ねたか。」

「箒が返事をするわけではない。口もないのだから。」

「だからお前は、人形師に嘲われたのだ。分からないのは読み取るお前の怠慢だ。言っても無駄だと分かっているから、箒も何も言わないのさ。お前が親に何も言わないのと同じで。」

「お父さんに言っても仕方がない。大人は長い間生きてきたのだから、その分正しいに決まっている。」

「だからお前は、道具屋に嘲われたのだ。父親の生き方が何になる。兄の、姉の、他人の生き方が何になる。意味あるものは多い方が優れるが、意味がないものは少ない方が得に違い

ない。」

「ならば、どうすればいい。」

「もう教えたさ。頭で知っているものが知識ではない。頭で理解したものが感情ではない。頭で考えたものが願いではない。ありのままを感じ取ること。それが魔法の第一歩だ。」

悪霊との問答をするうちに、魔理沙は沸々と煮え赤くなつた。握りしめた箒は、凝としていられず身を震わせた。あの悪霊を、一度殴りつけてやらねば気が済まなかつた。魔理沙は箒が望むままに、柄を悪霊へと傾けた。すると箒は、勢いよく地面を蹴つて悪霊へと突き進んでいく。箒に手を引かれるように魔理沙が一步を踏み込むと、悪霊は霧となつて消え去つた。魔理沙は何度か周囲を見渡した後に蹣跚と塀に歩み寄ると、激しく嘔吐した。饞えた唾液を何度か吐き捨てると、気分は何時にもなく晴れやかに感じられた。

その日の夜に、魔理沙は家人への書置きを残して家を出た。取り急ぎは香霖堂においてもらつて、何時かは自分だけの魔法店を持つと考へた。

それから何日かの後、魔理沙の母親は庭の手入れをしながら、納屋の壁に立てかけられた箒を見つめていた。その箒は、自分のことを嘲っているように感じた。母親は腹が立った。次に悲しくなった。が、また腹が立って来た。

「お前のお陰で、魔理沙は家を出てしまったのだ。」

そういうと、母親は箒を激しく地面に叩きつけた。暫く、母親は荒い息のまま箒を睨んでいた。が、ふと自分も幼い頃には、箒で空を飛んだり、魔法で火を起す夢を見たことを思い出した。自分が妻となり、母親になった時に忘れた夢だった。改めて箒を手にとると、その箒が少し空に向かって動いた様に見えた。魔理沙はきつと、立派な魔法使いになるだろう。すると間もなく、母親の顔はもとのように満足そうにぼんやりと柔ぎだした。

〈了〉

七雲結人

梅が香にむかしをとへば

吹き始めた木枯らしに木々が軋む。

秋に頑張つて咲いた花ももう色を失い萎れ、散つてゆくだけである。

時折吹き抜ける風に身を縮めるのも珍しくない、もうすぐ、冬が来たる。

色彩の失われはじめた庭の風景を、布団から身を起こし阿求は遠くを見るような目で眺めていた。

灰色の空と漂う静寂に、たまに吹く風の音とそれに混じる紅葉が僅かばかりの彩を添えている。

「最近、夢を見るの……小鈴」

隣に座っている小鈴という少女に阿求はそう呟いた。

「あれはいつのことだったかしら……もうはつきりと思いつけなけれど、小鈴と一緒に山中に見に行った梅の花。その夢か、幻を」

一息をついた後、そう阿求は言った。

「そう……阿求にはそれが見えていたんだね」

小鈴はそう答える。

その声色にはどこか哀しいものが混じる。

「……ええ」

「私はさ、この部屋から見える、色の無い景色を眺めていたよ」

そう語り合うと二人はしばし押し黙る。

ただ静寂が、この部屋を満たしてゆく。

「――」

静かに、小鈴は溜め息をついた。

友となり、そして互いのことを深く知ってゆくうちに、私はそれを知った。

阿求、ひいては稗田に連なる者は長く生きられないのだと。

それを知ったときの様々な感情が、いま頭の中に蘇っていた。

喻えようもないほど思い悩んだこともあったが、最後には私は覚悟を決めた。

阿求が死すまで、変わることなき良き友でいようと。

それは今も揺らがない。
しかし。

既にその持ち前であり天から与えられた才能、記憶力もとくに失われ、心身の衰弱も甚だしくなつて病の床に伏せる姿は痛々しい。

彼女が今見ているのも、現ではなく過ぎ去つた過去の幻のようなものだ。

けれどその一方で、その思い出を私ははつきりと覚えている。

そしてその埋めることのできない隙間に心中に涙する心地だった。

「他には——何か思うことはある？」

ふと阿求に訊ねてみる。

「いいえ、何も。もう私の役目は終わった、だから思うことも考えることももう何も無いわ」
「考えることを辞めたのなら、私と話すなんてできないと思うのだけれど」

「それもそう、ね。まあ一つ我が俣を言うなら、もう一度春の山に小鈴と出掛けたい。それ
かしら」

そう穏やかな面持ちで阿求が言った。

されどその奥には、役目や縛りから解放されたというようなものは見えすむしろどこか未練めいたものを私は感じる。

それが勘違いであつて欲しいと思うが、同時にそれはまだ私と阿求が友として繋がつてい証のようにも思えて、心が苦しくなる。

そんなことを考えている私をよそに、阿求は外の景色を見ていた。

そこに何を思っていたのかは分からない。

しかし——元より線の細く色白な阿求は病の床についたことでそれをより一層強くさせ、冬も近い色を失い始めた景色との対比、その姿と部屋の陰影が織り成す

景色は良く出来た水墨画のようで、ともすれば思わず嘆息してしまいそうだ。

床の間の花入れに一輪だけ生けられた花が、ささやかに色を添えていた。

「ねえ小鈴、貴女はつくづく不幸な人間ね」

「私の何が不幸だというの？」

「だってこんなにも早く友を喪うのだもの」

「それを言ったら阿求だって同じじゃない」

そんな問答をする。

「ごめんなさい、小鈴。嫌なことを考えさせてしまつて」

「構わないよそんなこと。それよりも、そんなことを言えるのなら阿求だつてまだ考えることを完全に捨ててはいないじゃない」

「それは確かにそうね」

苦笑する阿求。

私は出会ってから友となり、今までに至る思い出を振り返っていた。

私にとつてはそのどれもが色鮮やかなのだ。

「でもそれももう過去のこと。羨んでも戻れないし過去には戻れない、ならばやはり私は不幸だわ。こんな私と友になつた小鈴もね」

「まあ、そうかもしれないわ」

阿求の語るそれは偽りない現実。

私もそこまで言われればある程度肯定せざるを得ない。

そして事実であるがゆえに、苦笑ともなんともつかぬ笑いが漏れる。

「でも、そうであるのならせめて幸せな思い出に浸って逝きたいとは思わないの？」

私の問いに、阿求はただ首を振った。

「これも宿命なのかもしれないけれど」

そして訥々と語り始めた。

「もしくは役目を終えたがゆえか、もう私にはそんな区別は無くなったようなものなの」

私はただ瞑目して耳を傾ける。

「でも不思議なものでね。今日の前に居る貴女が小鈴だというのはわかる。同時に、おぼろげに浮かんでくるようなものもある」

そう語る阿求の目はどこか遠くを見ている。

「だけど、その一つ一つは理解できてもそれが一繋がりの記憶だということがもう分からな

くなり始めているの」

「そっか」

それを聞いて心に去来したのは、彼女がまだ彼女であった頃の楽しかったと言える記憶の数々。

浮かんでは消えてゆきその度に胸を締め付けられる。

そして友となつてから、いずれは今のようないざれが訪れると告げられたときの事さえも。そんな長いようでもあり、短くもあつたようなものに心揺られていた。

「なるほど。良き友にそうも言われれば不幸なものね」

「他でもない自分のことだから良く分かるの、命尽きるまでまだ時間はあると。でも、いつそ早く訪れてしまえばいいとも思っている」

「それは、なんで？」

問わずには居られなかった。

「まだ自分だけの考えを紡ぐぐらいはできる。だからこそ、幸福であつた時間を共にした小

鈴のことを思うと辛くなる。それは自分の寿命の残りを指折り数えるよりも辛い」

「だからって、そんなことは……」

「だからこそ、なの。過ぎ去った幸せを思い出そうとするより、小鈴にもっと辛い思いをさせるほうが、私にとっては命よりも重い」

ああ。

そう改めて本人の口から言われてようやく心で分かることができた。

どうあれ、もはや阿求に助かる道はない、それは予め定められていたこと。

そして言葉でそう言っているがきつと、阿求はもしかすれば今この瞬間も必死で、共に過ごした幸せな時の記憶の糸を手繰っているのかもしれない。

「阿求がそう思うならそれでいいよ。でも、私にとっては本当にその時が来る前に諦められるほうがなによりも辛いよ」

阿求のそれが我侭なら、私のこれもまた我侭だ。

今やそれがもはや交わることはない。

世の無常というものを私はただ儂んで居た。

「でも私は死ぬけどそれで無になるわけじゃない、転生するだけのこと。だから、もしかすればまた小鈴と……」

「それは違うよ」

私を少しでも安心させようとしていたであろう阿求の言葉を思わず遮る。

「一度壊れた器を直しても元と同じものには戻らない。人間だって同じ。稗田のことは私にはよく分からない、けれど阿求は私にとっては代えようの無い存在」

何も言わぬ阿求。

「それにもし私のことを微かでも覚えて戻ってきたとしても、その頃には私はきつと年寄りよ。それでもいいと思うの？」

「それならそれで——私は小鈴のことを——」

別に阿求のことを否定する気はない。

むしろ知らされる。

そんな考えに縋らなければならなくなって現実、この大切な友の命は間もなく尽きるということ——

「私はもう、そんなことはどうでもいいの。ただ私は、できるのならば。いつか行った山中にあった一本の梅の木とその白い花や香りを。気持ちのいいくらいに晴れた日にでも行きたい」

「そう、私も行きたい」

急に思考が明瞭になったという風に、阿求が力の入らない体を身じろぎさせる。

「だから連れていって、小鈴」

「……駄目よ」

「どうして？ それが出来たのなら、私はもう思い残すことはないし死んでもいいのに」

「死んでもいいとか、簡単に口にしたら駄目よ。そんなものからは何も始まらないし、なにより阿求のためにならないから」

嗚呼、とただ心の中で溜め息めいたものをついた。

阿求のその想いは本物だろう。

だが悲しいことに、それと現実との境が曖昧であることを、真実と夢想の境を彼女はもはや理解できていない。

助からない命とはいえつくづく悲しいものだ。

「まずは白い雪が降り積もり、寒さの中で耐え抜いて冬を越えて。春が来る瞬間に白い花を開かせる梅の美しさを想うといいよ」

そう言う和阿求はそれきり黙ってしまった。

「……また来るから」

どこか気まづくなって、逃げるように阿求の下を去った。

そのまま帰る気にはなれず、山がよく見えるところまでふと歩いてきていた。

空は相変わらず、色彩を失った曇天が重くのしかかるよう。

眺める山々も、まだ幾許かは紅葉の名残が見えるがそれらもまた鮮やかさを無くしたつま

らない、冬を間近に備えた色をしている。

そんな木々だけでなく、まるでこの世そのものが立ち枯れてゆくような、そんな事を感じた。ふと見上げた空の高くを群れなした鳥が鳴き声を残しながら飛び去っていった。

嗚呼、やはりどうにもならないと知っていてもやはり現は残酷に出来ている。

阿求と通じたと感じた想いさえただの空言なのだ。今私は思っている。

それは身に吹き付ける風よりもなお冷たく、身を切るように。

私とて、広い目で見れば明日をも知れぬものだ。

しかし阿求は最初から、あのようなものを知っていて、定めとして受け入れてさえているのだ。だからなのか、一抹の夢想がこうまでも身や心を苛んでいるのは私がまだ生きてゆくからこそなのか。

分らない。

ただど友として、それを知ったのは他でもない自らの意思ではないのか、と今一度自分に問い掛ける。

そしてこの天地が私に与えてくる苦痛というものを敢えて受け入れて、味わって、本を整理するように分析してみようと考えた。

まずはこの景色が連想させる無常というものを、心という味覚の上にそっと乗せた。其れはかくも、苦々しいものであつた。

いつもよりわずかだけ早く、初雪が舞つた。

冬が訪れた。

あれからも、幾度となく阿求の下を訪れている。

時が経つにつれてますます衰弱し、思考も少しずつ、だが確実に曖昧になりつつあるようだ。私に出来ることなど僅かしかないが、それでも何もしいよりは余程良いと思つている。今日も向かう道すがら、見舞いの品として飴を買う。

弱りきつた阿求にはまだ幾分向いたものだと思つている。

艶やかな鼈甲色の水飴。

寶石のような色付きの飴玉。

私を買って差し入れる度、阿求は喜んで食べてくれているようだ。

そこでふと、桃だけを食し生きているという天人の話を思い出した。

私に手にしたこれらが今、阿求の命を繋いでいるとしたのならどこか似通っているようで。己の立つ居場所と云うものの高さが少しだけ増したような気がする。

そんなつまらない思考に一瞬心奪われたあと、今日も見舞うべく阿求の下へ向かった。

「はい、代わり映えしないけれど今日も持ってきたよ」

「ありがとう、小鈴」

私の知るところではないが、こうして見ると私と会うときの阿求はどこか蘇っているようにも見える。

普段をどうしているのか分からないが病の床に着く者のそれは想像できる。

だからこそ、なのだろうか。

眺める阿求は、買ってきた水飴の入った椀を持ち、一匙一匙と味わっているようだ。

「しかしさ、こうして見ると不思議なものだよね」

「何が不思議だと言うの、小鈴」

「私と会えば僅かばかりでも昔のように戻るしさ、それにほんの少しばかりの気遣いの飴で命を繋いでるみたい」

「それは小鈴も似たようなものよ。貴女にはまだ先があるのにこんな私に尽くしてくれている」
「なら、結局は似たもの同士ってことね」

そう言つて互いに軽く笑いあつた。

こういうとき、私はふと貴人に献上をしているような気分になる。

もしくは相反する、檻の中の動物に餌をやるような。

現実と夢の境が曖昧なのは阿求だけではない。

結局は、私もまた似たようなものなのだ。

いつの頃からかそう思うようになった、そうでなければ私もまた現実と夢の狭間へ落ち

てしまいそうになるような気がするのだ。

それでも、阿求の何気ない無垢な言葉はその思いを揺るがすように、強く突き刺さってくることもある。

「嫌だとか、逃げたいと思うことはないの？ 小鈴？」

「それは、肯定もしないけど否定もしない。他ならぬ私が決めたことだもの」

「優しいのね」

「私だって阿求に聞きたいよ、私がむしろ節介をしているのかもしれないのよ。一人静かにさせていて欲しいと思ってるんじゃないかって」

それは常々心に引っかかっている。

私が阿求のことを気遣っているのは事実、だがそれがある種の憐れみのようなものと取られていないかと不安になるときがあるのだ。

「答えなら、小鈴と一緒。けれども、人は死ぬときは一人。ならばそれまで寄り添ってくれ
るものがあるのは幸せと呼べるでしょうね」

そう、邪なもの無言言葉で阿求は言った。

このように、かつてのように問答することがある。

だがその裏で私は色々な苦いものを噛み締めている。

どうあれ、それはかつてのものとは形が異なり、そして目を背けたくなるような現実がそこにあるからだ。

だがもしかすれば阿求もまた同じかもしれない。

これになんと名を付ければ良いのか、分からなかった。

それでも間違いないのは、少なくともこの部屋で阿求と対峙している限り、それは檻の中で睨み合う獣にも似たものだということ。

片や先は知れずとも未来ある命、片やあと幾らかで終わることの定められた命。

もちろん私も、そして阿求もそれをどうと思っているわけでは決していない。

だが現実という檻は嫌がおうにもそれを突きつけてくる。

そのつもりも無いのに、互いに睨み合っている。

私は阿求を憐れみ、阿求は私を羨むというただそれだけのことなのに、いや、だからこそなのだろうか。

「最近ね、一人で伏しているのが妙に寂しく感じるの。それだけしかできないというのにな」
腕を置いて阿求が言う。

「それは仕方のないことじゃない、ただでさえそんな体なのだから無理なんてさせられないわ」
「それでもね、現実をひたすら見つめ続けるよりも幸せな夢に浸るほうがまだましだわ」
それこそ、貴女と遊びたいくらいに」

と、どこか口惜しそうに阿求は言った。

「小鈴、貴女もそうではないのかしら」

ふとそう問い掛けられる。

「それは、そうに決まっているじゃない」

「ならば嬉しいわ。けれど、心のどこかでは諦めてはいないの？」

その言葉は刃の如く鋭く私の心を抉った。

「だとしたら、阿求は私をどう思うのさ」

「別に、ただいつしか私という存在が忘れられるであろう時は来る。生きるものとはそういうものよ」

思えば冬を迎えてそれなりに経った。

私はともかく、阿求は残された時間を指折り数えているようなものだ。

その心境は察するに余りある。

だからこそ、今の間答のようなどこか阿求らしくない言葉が出たのだらうか。

だがやはり、どこまで行っても生き続ける者と死に向かう者の隙間が埋まろうはずもない。それでも私はそれすらも受け止められる友であるつもりだ。

いかにすればどこか意固地とも言える阿求の心を解すことができるか必死に考えていた。

「私だってできることなら、できる限り阿求の傍に居てやりたいわ。でも、残された時間で何か出来ることはないかと考えるのもまた私のすべきことなのよ」

「こんな私に、まだしてやれることがあるとでも？」

身構えていてもやはり、そういった言葉を掛けられると心に来るものがある。

例えるなら、阿求の定めである死というものが私に蜘蛛糸の如く絡みついてくるかのようで。しかし、それは果たして私への妬み染みた一方的な言葉なのだろうか。

確かに阿求の現実というものは辛い。

だからこそ、吐き出そうとしているのではなからうか。

互いに必死で耐えている苦痛とでも言うべきものはあるのだ、それは間違いない。

「確かに、とは言えない。けれどこのまま時間が過ぎ去ってゆくことだけは絶対に嫌。だから私は苦痛を噛み殺してでも考えるのよ」

それきり、交わす言葉は無かった。帰路を歩む足取りはいつも以上に重苦しいものであった。

この罪悪感と云うものはつくづく厄介なものである。

抱いている間は心を苛み、過ぎ去ったと思っても心の奥底に澱みのようなものを残してゆく。いつかは消え行くものなのだろうか、今はそれがとても不快で仕方なかった。

「ねえ小鈴、今更だけどこんな私にどうしてこうも良くしてくれるの？　いつ旅立つかも分からないのに」

「だからこそ、なのよ。いつ永久の離別が来るかも分からない。けれどいつものように館を買って、阿求と様々な問答をしそれが少しでも長く貴女を現世に留めておける

やり方だと信じているからなのよ。それは他の何者にもできないし、ただ待っていても訪れるものでもない」

「どうして、そこまで言えるの？」

と、阿求は私に問うた。

「だって、阿求は私の友だから。できることなら、ほんの少しでも長く貴女の傍に居たいとさえ思っている」

「小鈴にも、生きていく以上すべきことがあるというのに？」

「阿求はそれが定めと受け入れているでしょう、でも心のどこかでは寂しいと思っているはず。だって、私だって今こうしていてもいつか離別が訪れると思えば寂しくなる。」

違う？ 阿求……？」

私はそう阿求に問うた。

僅かな沈黙の後。

「……寂しくないわけ、ないじゃない」

振り絞るような声色で阿求は答えた。

「そうでしよう、誰だってこんな現実に直面したらそう思うに決まっているわ」

「でも、小鈴はまだいいわ。まだまだ先を目指すことができるのだから。私にはもう何も
ない」

「ならば、捜せばいいじゃない」

私の言葉に、阿求は意外といった表情をした。

「何を、捜せというの？ もはやその時まで床に伏せていることしかできない私に」

「それは阿求自身にしか分らないことよ、所詮は他人である私が口を挟めることじゃない。でも、何も出来ないと決め付けるより何が出来るかと悩むほうが私はいいと

思うわ」

思えばこれは些か無責任で身勝手な論理かもしれない。

だけど、心を通わせた友だからこそそう簡単に定めだから仕方ないと諦めてほしくないのだ。例え病の床からでも、見つけられる何かがきつとある。

「……そう、でもこれは弱音かもしれないけれども私は、小鈴が居ないと何も出来はしないの。貴女が居なければただ伏して天井を眺めるだけなの」

「暗い話は止めましょう、阿求。それこそ貴重な時間の無駄だわ。貴女も寂しいし私も寂しい思いをしている。だからこそ見つけようよ」

「確かにそうね。今私はつくづく、小鈴が友であってよかったと感じているわ」
「ありがとう」

ただその言葉で、心の底の澱みが消えてゆくような心地だった。

私の心には常に重荷が押し掛かっている。

確かに私は阿求のことを思つて行動し、そしてそれが彼女の残り少ない命を繋いでいるものだと信じている。

しかしそれは、裏を返せば私の思うまま一つでどちらに転ぶか分からないと云うものである。

それこそ、檻の中の獣と接することと何が違うだろうか。

果たして私にそんな資格が有るのだろうか。

それは罪悪感の残す、心の底の澱みよりさらに根深いものだ。

一度それを意識してしまうと、もはや私は蜘蛛の糸に絡み取られた一匹の蝶も同然だ。

阿求と顔を合わせる度に表では友として振舞えても心はそれに捉われたままだ。

大袈裟だが誰かの命の綱を握っているというのは気分が良いものではない。

別にそれを気付かせた阿求を恨むわけではない。

だが一度気付いてしまった以上それを振り払うのはなお容易なことではない。

錯覚にしか過ぎないかもしれないのだが私もまた阿求の苦しみとでも云うものに侵されつ

つあるようだ。

それは容赦なく私の身と心に染み込んで離れようとしなさい。

それでも私は己の身を刻むように苛まれながらも、私に、私でなければできないことを続ける他はないのだ。

その鋭利な現実という刃と云う名を冠した論理の上で。

冬という季節が歩みを進めるのと同じように阿求もまた少しずつ、だが確実に衰弱の一途を辿っている。

その腕も冬枯れした木の枝じみた細さになり、湛える表情や発する言葉に変わりはなくともその顔は病人のそれである。

私の差し入れる飴も、当人は生きるためと頑張っているようだが次第に喉を通りづらくなっているように見えてしまう。

それを見る度胸が痛む。

されど私は阿求の命を少しずつでも繋ぐための努力をする。

其れが善き行いか悪しき行いかなどと云うことは最早考えぬことにした。

仮に罰を受けるとしてもそれは後でいい、今はただ阿求を繋ぎ止めることばかり考えている。

「ねえ小鈴、貴女になら頼めるから何か今まで読んだ話でもして欲しいの」

唐突な申し出に少し驚く。

「それは良いけれど、なぜ？」

「だってこうして伏せているだけなのだよ。少しは楽しみのようなものが欲しいのよ」

それを聞いてさもありなん、という気持ちになった。

無常だが、阿求が伏せている間も浮世は回り続けて居る。

もしかすれば取り残され、独りだと感じて居るのかもしれない。

それを聞いてなんと気の毒かと私は思った。

「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」

玉しきの都の中にむねをならべいらかをあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。

或はこそ破れてことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、

わづかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづかたより來りて、いづかたへか去る。

又知らず、かりのやどり……」

そうして頼まれるまま、ふと心に浮かんだ作を阿求と己に向けて語った。

果たしてあとどれだけの時間が残されているのか。

考えまいとしても其れは嫌でも、鎌首をもたげる蛇の如く心の何処からか顔を見せてくる。私とて生きる以上はすべきことがあるが、冬が進むに連れて阿求と過ごす時間のほうが長くなって居る。

分かつている。

阿求のそれは逃れえぬ定めであり抗えはしないと。

いかに腕の立つ薬師であろうと彼女の命を幾許かでも永らえさせることは出来ぬと分かつて居る。

それでも阿求が私と触れ合っているとき、其処に微かでも生きる力を感じるのは私の思い上がりだろうか。

真実はいつだってそうだ、姿を容易に見せなくせに全てが過ぎ去ってようやく正体を現す。

——それならば、私はこのままで良いのか。

——私に最後まで、其の時間が訪れるまでこうして居られる覚悟は有るのか。

ふと、そう己に問うてみた。

幾ら阿求のためと唱えたところで己の身を磨り減らして居るのは確かなことである。

しかし諦める事を拒否する己が居て、そして最後まで見届けると決めて動かぬ己もまた

居る。

その時が来るまでは分からぬが、とにかく私はそう決めて居るのだから。

「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそ儂きものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ萬歳の人身をうけたりという事を

聞かず。一生すぎやすし。今に至りて誰か百年の形体を保つべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、遅れ先立つ人は、元のしづく、末の露より

繁しと言えり。されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、即ち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔

むなしく変じて、桃李の装いを失いぬるときは、六親眷属あつまりて嘆き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず……」

冬の雪の如く、憂きことは尚も、また尚も降り積もつてゆく。

それが他人の死を見届けるといふ私が背負つた重荷なのだろう。

雪解けの頃にはその重荷も消えるのだろう、だが果たしてその時私は如何するのだろうか。

悪しき想像は悪しき現実を招き寄せるとも云うが、この頃はふとそんな事を考えてしまふ己が居る。

「なればもつと、憂き事は積もればよい」

既に定めにて死を間近にした阿求の心情を察すれば、傍に居ると決めた私もまたそういったものを背負うべきであると思つた。

私の行いと云うものは、謂わばその重さを阿求のために、そして何より自分のために誤魔化そうとしているようなものである。

だが其れで良い、重きに耐えかねて倒れるよりも遥かに良い。

時の短さを思えば、其れで良いのだ。

「天よ、我に艱難辛苦を与え給え」

されどやはり現実とは残酷なもので、阿求の弱り具合は冬を越えるのは厳しいであろう、ということを知つた。

それを聞いた瞬間の私は血の気が引いてゆくのを感じながら曖昧にただ嗚呼、としか言えなかった。

どこか放心し、積もった雪を踏み締めながら亡として歩んでいた。

空は白と僅かな黒に重く垂れ込めている。

私程度の覚悟など、現実の前ではいとも容易く碎かれるものであった。

そんな己の愚かさを嘆き、そして次はどう阿求の顔を見れば良いのかということを考えて居た。

知ってしまった以上、果たして今までと同じように居られるのか。

それすらもはや確証が持てないほど、私の足元は揺らいで居る。

これではまるで逆まだ、死に行く阿求のほうはまだ強く生きて居るとささ言える。

色彩の無い景色を眺めているとつと涙が一筋流れ落ちた。

「緩やかに死にゆく者とそれを眺める者、果たしてどちらが苦しいのか」
ふとそんな言葉が口をついて出た。

其のまま、行く当てもなく彷徨っていた。

彷徨い歩いた末、湖半に辿り着いた。

冬の湖畔はしんと静まり返っていて、澄んだ水鏡だけが空と言う時の移ろいを映し出している。

思えば此処にもいつか来たような気がする。

白に沈んだ色彩の景色を見てそんな事を思い出した。

ふと、懐に入れていた笛に気付く。

手慰みにと、些か下手の横好きのようなものではあるが覚えたものだ。

自身ではまだ羞恥の心を抱くと言うのに、それでも阿求は真剣に耳を澄まし、そして褒めてくれたものだった。

「――」

それを思い、一曲奏でてみることにした。

見るものも聴くものも居ないがそれで良い。

そうしてただ、心に浮かぶものを表わす音色を響かせる。

不意に風が吹いて風花を舞い上がりさせ、それが私を取り巻くように舞っては消えてゆく。それはまるで、もは幾ら追っても二度と届かぬ在りし日々の欠片のようで。

頬を涙が伝うのを感じながら、ただ奏で続けた。

分かっている、己に残された時間の少なさというものを。

其れが定めと知っているから恐れは無い。

ただ、友を残し逝くということにだけはこのほんやりと霽がかった頭でも分かる。さりとてもはや残せる、或いは伝えられるのは言葉だけ。

ただ其れだけがとても心残りであり、そして悲しみであり未練じみたものである。私一人ならばそんなものは自分で持っていたらだろう。

だけど、大切な友にまでそれを背負わせてしまった。

「……………」

ふと、何処かから笛の音が聞こえてきたような気がした。

それも、どこか懐かしいような響きを持つて。

それは錯覚かも知れない、が今は敢えてそれに身を委ねてみることにした。

移ろいゆく四季のような音色、だが必ず最後に悲しさのようなものが残るのは——この笛の音色の主は泣いているのか悲しんでいるのか。

ただ目を閉じ、それを聴いていた。

悲しげで、だけど同時にどこか優しい、慈愛に満ちた一管の笛の音を。

心に染み入るような音色に、微かに、おぼろげな頭の中に懐かしい光景が見えたような気がした。

しばし、それに身と心を委ねていた。

とても穏やかな心持ちであった。

「死とは、一体何たるものか」

死とは何か、死によって分かたれるとは何か。

緩やかに死に行く者を見送るということは何かと考えていた。

そしてその答えとは案外にも簡単なものであった。

「ただ、超えられぬものによって永久に分かたれるだけ」

たったそれだけの、だが覆すことは決して叶わない絶対にして無常なる世の理。

そこまで思い至り、溜息をついた。

既にその定めが決まっているものを、その時まで眺めているのであればそれはさながら死神の如きものであろう。

そうだとしたら。

「——なれば、私は優しき死神であろう」

ただ傍で見続けるだけの存在でなく、彼女が心安らかに旅立てるまで限りなく優しくあると。

それが見送るものであり、後に残される私が出ることなのだろう。

矛盾した存在かもしれないがそれで良い。

そうであるからこそ私は、阿求を最後まで看取るのだ――

見舞う度に、弱り果ててゆく阿救の姿は見る度に心が痛む思いだった。

腕も枯れ枝のように細くなり果て、意思は通じるが時折、私と彼女の見ているものの違いをどうしても感じざるを得ない。

「ねえ小鈴、もう少しだけ――手を握っていてくれないかしら」

阿求の言葉に応じる。

「――」

嗚呼、温かい。

阿求はもはや死という定めからは逃れられない。

だけど、あと幾らあるのかも分からない時間というものが無駄にすることなく必死に生きているのだ。

手から伝わる温もりがそれを雄弁に語っている。

「小鈴、どうして泣いているの？」

何も答えることはできなかった。

ただ阿求の手を握り、その温もりに己の救いを見出そうとしていた。

そのような時間が過ぎ去ったあと。

偶然にも里で阿求を診ている医者と出くわし、言葉を交わした。

曰く、もう次の春まで持つがどうかとも怪しいのだという。

それを聞いたとき、私は血の気が引いてゆきこの冬の寒さとも違う、嫌な感覚が背を上つてくるのを感じた。

そうして、まるで天と地が引っくり返ったような思いを抱き、さながら幽鬼の如き足取りで何処へともなく歩んでいた。

空には白に薄墨を混ぜ込んだような雲が立ち込めていた。

そして気がつけばまた湖に来ていた。

風は無く、鏡のような水面を見つめながらふと私は思った。

逃げるのならば今だと、これ以上弱り果ていずれば死すべき阿求の姿を見たくないというのであればまさに今しか無いのだ、と。

「止めてしまえば、美しいままで」

私の中の阿求との時間というものを止めてしまえば、それはずっと美しいままで其処に在り続ける。

それが真実なら、もう二度とあのような姿の阿求など見はするまい。

だが――

本当にそれで良いのか、と自分で自分に問う。

それではまるで自分勝手な現実からの逃避であり、そうしたら最後、阿求はただ一人で逝く。

そんな事は、余りにも悲し過ぎるではないか。

「死とは、何のためにあるのか」

そう思い至ると、止め処も無く涙が溢れてくるのが分かった。

その様な心を抱いたまま、またいつもの如く阿求の下を訪れていた。

「ねえ阿求、今なにか欲しいものは無い？」

ふとそう訊ねる。

「小鈴、あなた——もしかして泣いていたの？」

「そんなこと……」

その言葉に思わずどきりとする。

「私には分かるわ。こんなになっても、貴女の友なのなもの」

「だとしても、どうして私が泣くと分かるの？」

「当たり前のことよ。自分のことは何よりも自分が一番良く分かっているもの」

そう言って阿求は天井を仰いだ。

その表情には私に対する憐れみや、色々への悲しみのようなものすら無くどこか澄んでさ

えいる。

私はただ黙つてその姿を見ていた。

——もう残された時間は少ない。

——さりとして、もう私から阿求へと、そして阿求から私へと与えられるようなものは全て使い切ってしまった。

もう何も残っていないのか。

果たして本当にそうなのだろうか、残る僅かな時間でそれについて考えてみることにした。できることはきつとある、それが阿求への餞別となるものだと思つて。

或る日の事、阿求と話をした。

「ねえ小鈴、私はもう考えることを止めてしまおうかと思うの」

「それは——どうして？」

「可笑しい話だけれども、自分でも良くはわからないの。でも、ただ疲れたとでも言うのか

しら。このまま、眠ってしまいたいわ」

「眠るって、それは死ぬまでということ？」

「ええ、死ぬこと自体は怖くはないわ。それよりも——昔のような自分でない自分を見つめ続けるほうが遥かに怖くて苦しいの」

阿求はそう、どこか遠くを見つめるようにしながらそう言った。

「でも、小鈴には済まないと思っっているわ。あれだけ、このように成り果てた私にとっても良くしてくれた。……ごめんなさいね」

私は何も言えずに居た。

「小鈴のことは、こんな曖昧な頭でも分かるわ。本当に悪いのは稗田の定め。そう、それだけのこと」

「……確かに、そうだよね」

「でももうやるべき事はさっぱりと終えたし、残すべきものも残した。もちろん貴女にも。私が逝ったあと——見てね」

もはや言葉もなかった。

——確かに、この現実には悲しむべきものであることに違いは無い。

だけど、これ以上悲しませるようなことを言つて欲しくはないと思つたのは我俣だつたの
だらうか。

その瞬間だけは、まるで冬枯れした木々のように阿求だけでなく私もまた弱くなつていた。
呑まれまいとしても、友の言うことであるが故にどうしようも無かつた。

されどそれもまた気持ちを共有できて居ることに違いはない。

——だからこそ、私は何をしてやれるのかを。

考えねばならない。

冬の寒さと雪に木々はさながら白骨のように朽ち果てている。

白と微かな黒が混じる以外の色彩の無い光景はただひたすらに無情である。

かつて阿求と診た白梅のある地もまた同じ。

それを見下ろしながらそう思った。

空を渡り鳥の群れが一つ二つと、高い鳴き声を残しながら飛び去っていった。

「さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙となし果てぬれば、ただ白骨のみぞ残り。あわれといふも、なかなか疎かなり。されば、人間の儚き事は、

老少不定のさかいなれば、誰の人も早く後生の一大事を心にかけて……」

ただ世の無常を思い、いつかの続きを謳っていた。

阿求はもう、残された時間をただ死というものに向けて使うことしか考えていない——

——きつとまだできることが在ると思うのは、私がまだ生き続けているからこそそのものなのか。

——分からない。

ただ、ともすれば諦観にも似たそれに吞まれまいという意思だけは揺るがせてはならない。

——諦めては、ならない。

そうして四六を数える時を、阿求のために何が出来るのかと言う思考に費やしていた。そしてふと思に至る。

もはやあの日あの時の、思い出の地に行くことは叶わぬ。

だがせめて、その思い出の欠片程度であればこの冬の中でも持って行くことは出来るのではないかと、と。

幸いにもその手段と、それが出来る人物を私は知っていた。

「それで、私のところに来た、と」

「……うん」

その相手とは、此処幻想郷でも指折りの大妖怪であり、そして四季の花においては並ぶもの無しという風見幽香だ。

彼女ならばこの白き死に沈んだ冬の中でも、ほんの一欠片程度でも春を持ってくることのできるはずだ。

本音を言えば相手が相手ゆえにどこか萎縮してしまう思いだ。

——それでも、他に道は無い。

そうして今抱いている現実と想いの丈を包み隠すことなく、全てを語った。

「……成る程、確かに美談ね。そして貴女が友を思う気持ちも。……結論からすれば、してあげることはできる」

返ってきたのは好意的な答え、しかしそれに風見幽香は「ただ、と言葉を継いでさらに語った。」

「だけどそれは、その思い出の白梅に無理をさせるようなことでもある。言い換えれば本来の寿命を削るようなもの」

それをただ黙して聞いていた。

「仮にそうなって、枯れてしまおうとしても——貴女はそれを背負う覚悟は有るのかしら？」
彼女だから分かる、そしてそれ故に重い言葉に思わず答えを出そうとしても詰まる。

確かにそうだ、阿求は大切な友人だ。

だがそのためだけに、また別のなにかを犠牲にするような真似をしてしまつて良いのだから

うか。

——それでも、私の答えは変わらない。

それに、もうそれ似た重き荷などとうに背負っている——

「……分かったわ。貴女の願い、叶えて差し上げましょう」

憐憫ともなんともつかない表情を浮かべながら私を見て、風見幽香はそう言った。

そして二人、白く色彩の無い中を歩んで、あの思い出の白梅のある地へと向かった。

果たして、その白梅の古木はかつてと同じ場所に佇んでいた。

だが、積もった雪という味気のない色彩に囲まれ、己自身も枝に雪を乗せている姿は実に空しきものだ。

——それでも、私の頭の中には、在りし春の日の光景がありありと浮かんでいた。

「——願います、幽香さん」

頭を垂れて、今一度限りの我侬を懇願する。

そしてそれは在りし日に思い出をくれた白梅に対しても。

「ええ」

風見幽香はただそれだけ言うと、白梅の木を見つめてただ一度指を鳴らした。

すると白梅の木は春の日のような薄い光に包まれる。

枝に積もっていた雪は溶けるようにして滑り落ち、次第に生命の力と云うものを取り戻してゆくようだ。

そしてその枝に一輪、また一輪と白い花を咲かせ——その香りを漂わせ始めた。

「ああ」

それによつて揺り起こされた記憶に思わず落涙しそうになつてしまふ。

——何よりも、此処に阿求が居ないということが、とても悲しきことであつた。

「これで十分でしょう。さあ、貴女と貴女の友の願いを叶えてあげなさい」

冒としていたところに声を掛けられ、本来の望みを思い出す。

借り受けてきた阿求の衣に、このためだけに特別に咲いた、思い出の白梅の香をたつぷり

と纏わせる。

そしてそれを大切に、箱へと仕舞った。

——今、たった一つの、されど大切な願いは叶った。

風見幽香は、礼など不要と私を氣遣ったのかそれ以上は何もせず、何も言わず去っていった。

それを見ながら心の中でただ一言呟いた。

有り難う——

と。

千々に乱れていた心も今は静かに、穏やかに波立たぬ湖の水面の様に落ち着いている。

今まで積み重ねてきた様々なものが失われてゆく様は、この曖昧とした頭でも彼女は分かっていた。

しかしそれは定めと受け入れ、眠っては夢と覚めて消え逝くことを既に受け入れていた。

そこには人らしい願い、未練すらも含まれていた。

されど冬の心地良い、清らかな白さはそれを感じさせることはない。

斯くして彼女はまた、何かを捨てたであろう夢から現し世へと目を覚ました。

そして——その横には友が居た。

「小鈴」

「また——何かを失ったのね」

その言葉にどこか細かい声で阿求はええ、と答えた。

小鈴はそれに微かに顔を曇らせる。

いよいよ、残された時間は少ないのだと、交わした言葉以上に他の何かを雄弁に語っている。

しかし、それでも最後まで残るものは有ると小鈴は告げると傍らの箱を開けた。

瞬間、全てが冬の白と静寂にさびれていたような狭い部屋の中に欠片ほどの春が訪れる。在りし日の、白梅の香が部屋を満たした。

「それでも——変わらぬものは此処に在るの、阿求」

そう言うのと、まるで貴人に献上するように白梅の香を纏った衣が阿求の前に差し出された。

「ああ——確かに、小鈴の言う通りだわ」

衣を受け取りただ一言、そう阿求は言った。

「春が、訪れたわね」

「ええ。これは——何処から来たのかしら」

「言うまでもないわ。ただ、貴女のためだけに——特別に一足早く訪れたのよ」

小鈴がそう言うのと、阿求は痩せ細った腕で衣を掻き抱いた。

言葉は無くただ、ただ愛おしそうに。

そして、其れが思い起こさせた曖昧でも幻想でも無い在りし日の確かなる思い出に微かに涙を浮かべながらそれに浸って目を閉じた。

涼名 本居小鈴の日記

私——本居小鈴——が、^レそれ^レを見つけたのは、親友である稗田阿求の七回忌の年だった。
^レそれ^レ——家の仏壇の裏にまるで隠されているかのように仕舞い込まれていた古びた冊子——を手に取るとパラパラとめくって中を確かめる。

「……………」

^レそれ^レは日記だった。

私が書いた、阿求が死を迎える直前、約ひと月間を記した日記。それが目の前に現れたのだ。

私の視線と意識は見る間にその日記に吸いこまれていった。



五月四日

「ありがとう。よく来てくれたわね、小鈴」

阿求は自室の中央に敷かれた布団に横たわりながら、身じろぎもせず私に言った。

「無理を言つてごめんなさいね」

「ううん、いいのよ」

屋敷に来て話し相手になつて欲しい。

私は阿求からそんな連絡をもらつてすぐさま稗田邸に駆けつけた。

阿求の頼みなのだから煩わしいとも思わなかつたし、なにより阿求が幻想郷縁起の執筆を終えてからというものの転生の準備とやらでほとんど会うことが出来ていなかったものだから、久しぶりに阿求に会えるというのは本当に嬉しいことだったのだ。

「阿求。呼んでくれてありがとう。会えてうれしいわ」

私は心に浮かんだ通りのことを口に出していた。

「ええ、私も小鈴が来てくれて本当にうれしいわ」

阿求はやはり布団に横たわつたまま僅かに視線だけ私の方へ向けるとそう言つてくれた。

「ごめんなさい。もう体を起こすことも出来ないのよ」

「……………」

その言葉に、私は何も言い返すことが出来なかった。

私が阿求の布団のそばに近づいて座ると、阿求は布団から手を伸ばして私の手をそっと握って微笑んだ。

「……………」

この部屋に通された時から、私は阿求の変化に気が付いていた。

だが、自分でも認めたくなかったのだろう。そのことを認識しない様に必死になっていたのかもしれない。

今、私の目の前で横になっている人物。

それは私の記憶にある阿求よりも確実に痩せていた。すこし骨ばった青白い顔。私の手を握っている張りのない皮と骨。淵の黒ずんだ瞳。

これがあの気丈で自信家だった阿求なのだ。

今の阿求なのだ。

「あのね、阿求——」

私は決意するように息をのむと阿求といろんな話をした。会えなかった間お互いに会ったこと、他愛のない里の噂、思いつくことは端から全て口に出していた。

一通り会話を終えた後、もうすっかりと夜も更けていた。

「あらもうこんな時間？」

「ほんとだ……。じゃあ私、帰るね……」

「うん……。今日は本当にありがとうね」

阿求が寂しそうに言った。

その声を聞いて私の中で何かが弾けた。

「ねえ、阿求。私、これから毎日貴女に会いに来るわ」

「え？でも迷惑でしよう？お店だってあるのに」

「なんてことないわよ」

私は力強く笑ってみせた。

そうして、私はそれからしばらく阿求の元に通うようになったのだ。



五月五日

その日も私は阿求の元を訪れて何気ない会話を楽しんでいた。

相変わらず阿求は横になったままだ。

しばらく話をしていると阿求が布団の中でもぞもぞと動き出したのが分かった。

「あの、小鈴……」

「ん？ 何？」

「寝返りを打たせてほしいのだけれど……頼める？」

申し訳なさそうなその声は、死体から出てきたのと思うほど勢いの無いものだった。

「え……？ あ、うん。わかった……」

私は少しだけ戸惑った。今の阿求は自分で寝返りも打てないほどの状態だということを理解するのに時間がかかったのだ。

私は阿求の体と敷布団の間に手を入れる。

「よいっしょ」

「ううん」

そのまま阿求を転がすように動かして背中がこちらを向くようにした。

私が力を入れる度に阿求から小さな声が漏れる。

「もうひとつ」

「ううん。ありがとう」

阿求は無事にうつぶせになった。

「うん。よかった」

私の手には阿求の体の感触がずっと残っていた。阿求の体を動かすのはそれなりに力が必要だったはずなのだが、その感触は重いでもなく、軽いでもなく、何か「なにもない」ものを転がしたようなそんな感覚だった。

その日はそのまま阿求から寝息が聞こえてきたので、静かに帰ることにした。

阿求の部屋を出るとそこには稗田邸の女中頭さんが立っていた。

女中頭さんとは私も顔なじみでよく知っていた。阿求の生まれる前から稗田家に仕えている品の良い少し厳しそうな目つきをした初老の女性だ。

彼女は私に深々と頭を下げると無言で阿求の部屋へ入っていった。

私は阿求の部屋に向き直ると同じように深々と頭を下げてからその場を後にした。



五月九日

その日は阿求に頼まれて手紙の口述筆記を引き受けていた。

阿求が口にした言葉を手紙に認めるのだ。

「手紙なんて私的な物の内容、私になんて聞かせてもいいの？」

「大丈夫よ。ただの形式的なお札の手紙だから」

「私の字なんかでいいの？」

「今の私よりずっといいわ」

阿求は自虐的に笑って見せた。

「いいから、さ、準備して」

私の了解を取り付けるのもそこそこに阿求は手紙の内容を口に出し始めていた。私は急いで紙と筆に向かう。

阿求の言う通り内容は里の商家へのお札の手紙であった。

阿求の口からはするするすると文章が語られていく。衰弱していてもその文章の美しさは

流石だなと思った。

そうして私は阿求の言葉を一字一句聞き漏らす事が無いようにタイプライターとしての務めを無事に果たし終えた。

「お疲れ様、ありがとう」

「どういたしまして」

私は語り通しだった阿求の方が疲れているのではないかと思っただが、それを直接口には出さなかつた。

「お互い休みましょ。女中頭さんにお茶を淹れてもらってくるから」

「そうね」

その日はそれで終わった。



五月十二日

その日はずっと雨が降っていた。

私が阿求の部屋へ行くと阿求は寢息をたてていたので、起こさない様に注意しながら少し障子を開けて雨が降る様をずっと眺めていた。

「小鈴？ いるの？」

どれくらい経った頃だろうか、目を覚ました阿求が言った。

「ええ、居るわよ」

「よかった。小鈴、少しお願いがあるのだけれど」

阿求が布団の中でもぞもぞと動いているのが見て取れた。

「どうしたの、阿求。また寝返り？」

「……いいえ。あれををお願いしたいのだけれど」

「あれを？」

阿求の視線は部屋に置いてあったあるものを指していた。

——尿瓶。

そこに有ったのは間違ひなく尿瓶で、それはつまり阿求は私に小便の世話をして欲しいと、そう頼んでいるのだ。

私の頭の中がぐわんぐわんと揺れていた。

嫌だ、とかそう言う感情ではなかったと思う。

ただ、私が阿求にしてはいけないような、ひどく禁忌を孕んだお願いなのだ、そう感じただのだと思う。

「女中頭さん呼んでくるわ」

私が立ち上がろうとした時だった。

「待って」

ここ数日のうちで聞いたこともないような力強い声だった。

「間に合いそうにないから……貴女にして欲しいの。お願い」

その声は弱弱しさなど全くない。全盛期の阿求の声そのものに聞こえた。

「いいの?」

「お願い」

「わかった」

私は覚悟を決めた。

私は小さく息を吸い、吐き、ひとつ唾を飲み込むと、尿瓶を手に取り布団の隙間から阿求の股の間にそれをあてがった。なるべく何も見ない様に。

ややあつて尿瓶の底に谷川の清水の音。

私は無心であろうとしたが、その音だけはしっかりと頭に響いていく。

私は無意識に瞳に涙をためていた。そのことを阿求に気付かれない様にまた必死だった。音が止むまでの永劫に思える時間が終わった後のことは何も覚えていない。

■

■

■

■

五月十四日

阿求の容体が急変した。
会わせてもらえなかった。



五月十六日

阿求が体調を持ち直したとわざわざ女中頭さんが伝えに来てくれた。ほっと胸を撫でおろす。
だがまだ会うことは出来ないらしい。

五月二十四日

阿求からまた来て欲しいとの連絡が来た。

私は山の天狗よりも早く駆けて阿求の元へと飛んで行った。

「阿求……よかった。私、私……」

「なんて顔しているのよ、小鈴。まずは鼻水を拭きなさい」

その時の私の顔は、涙でぐしゃぐしゃだったのだろう。ここ数日ひよつとしたら阿求にはもう会えないのかもしれないと不安でたまらなかったのだから。

久しぶりに会った阿求の様子は、先日よりももう一回り小さくなってしまったようにも感じたが、それでも気さくに話しかけてくれる彼女に私は嬉しくてたまらなかった。

私達は少し話をし、あつという間に時間が過ぎて行った。

「あ、もう帰らなきゃ……」

その日は親戚の通夜がありどうしても早めに戻らねばならなかった。だが、阿求から離れてしまうのがどうしても躊躇われた。

「やっぱり、私もう少し貴女と——」

「だめよ。冠婚葬祭は義務だわ。行つてらっしゃい」

阿求にそう窘められて私はしぶしぶ重い腰をあげた。

「……私が戻るまで、生きている？」

「生きているわよ。行つてきなさい」

阿求は声だけで器用に笑つて言った。

そうして私は稗田邸を後にした。



通夜に参加した帰り道。

履物の鼻緒が切れた。

私は、強い不安に襲われて、履物を脱いで裸足になって阿求の元へ駆けだしていた。道中の送り提灯の白と黒とがやけにはつきりと夜の道に浮かび上がっていた。

その夜、再び容体の急変した阿求は夜中十二時ころまで息があったと記憶している。



「……………」

日記がそれ以降白紙に終わっていることを確認し、意識が現代に戻ってきた私は日記から目を放しほんやりと宙を眺めていた。

読み終わってまず不思議に思ったのは、私は今の今までこんな日記を描いていたことを忘れていたことだった。さらに言えば書かれていたことについての記憶も所々あいまいだった。

改めて人の記憶というものがあてにならないものだと思ひ知る。

私は、店の片隅に積んである彼女の幻想郷縁起を見ていた。

この本は阿求が生きた証そのものだ。

ふと思うことがある。その一生を御阿礼の子として幻想郷縁起の執筆にあて、そして死んでいった阿求は幸せであったのかと。

使命の為に生き、使命の為に死ぬ。そんな生き方を私はしていないので本当の所は良くは解らない。けれどひよつとしたら阿求は自分の生涯を悲観して死んでいったのではないかと、そんなことを思ってしまうのだ。

だが、その度に阿求の怒った顔が私の脳裏に浮かぶ。

〃勝手に他人の人生の是非を決めないでちょうだい〃

私の中の阿求がそう言っているような気がした。

だから阿求はきつと満足してこの世を去ったに違いないと今でも私は思っている。

何故なら私は彼女の叡智と慈愛とを信じているから。〈了〉

近藤貴弥

水仙の花束

稗田阿求の書齋が、そっくりそのまま永遠亭の一室に移され、いよいよ冬を迎えただろうか。永遠亭で用意された阿求の書齋は、元の書齋よりも広く、山のように置いていた資料や草稿を置いてはまだ十二分な広さを保っており、布団や寝具を置く余裕すらあった。書齋と寝間が兼用されることとなった。

阿求が自由に動けるのは、この広い部屋だけ。しかし、阿求にはあまりにも狭い。

布団から出た阿求は文机の奥まで歩み、部屋の外へ音が漏れないようにそつと窓を開ける。竹が視界一面に広がり、緑に染まる。竹は真つ直ぐ天まで伸び、天高いところで微かに重なり合っているのか地に影を落とし、陽の光をまばらに注ぐばかり。

永遠亭の周りには人里のように商家は建っておらず、通りからの呼び声は聞こえず、ただ竹の葉が風に揺れる音が聞こえるだけだった。

窓の反対に位置する襖の向こうでは、室内の物音に気づいたのか、ウサギの足音が一つ、二つ。室内の阿求を気遣うように。

布団に戻ろうと阿求が振り向いたのと、引き戸が開いたのはほとんど同時だった。ウサギ

が入ってくるのと思っていたのだが、その頭に長い耳は見えず、白髪に赤いリボン。見覚えのある顔が、阿求の調子を尋ねる。

「調子はどうかしら？」

意外な来訪に驚く阿求に対して、客人である藤原妹紅は落ち着いた声音だった。阿求は落ち着きを取り戻し、布団に戻ることになく、背中に柔らかく冷たい風を受けて答える。

「今日は妹紅さんなんですね」

「ウサギは皆、忙しいみたい。意外かしら？」

「意外、ですか？」

「私がこうして来るってことがよ」

「今日が初めてではないのに、意外も何もありませんよ」

「それもそうね。それで、調子はどうかしら？」

「普段と変わらず良い調子です」

阿求はいつもと返事を、妹紅に返した。毎朝様子を見に来るにウサギに混じって、妹紅も

阿求の元を訪れ、調子を確認する。ウサギ達の事務的な確認とは異なり、本題に入るまでの枕詞のようなものだった。

妹紅は文机の近くに腰を据える。阿求はいつもそうしているように文机の前に腰を下ろし、紙と筆を用意する。

妹紅の白い指先から、微かに土の匂いがした。竹林に足を運んだり、警備に勤しんでいたのだろうか。妹紅がここに足を運んだ時に話すことは決まって、外のことだった。迷いの竹林を超えた広い世界のことを、語ってくれる。阿求がここを出られない代わりにのように。

元の屋敷にいた頃よりも快適なような気がするが、自由に外に出られないのは困る。阿求は多くの時間を書齋で過ごしていたような人間ではなく、必要であれば幻想郷の至るところへ足を運び取材を行っていた。幻想郷の全てを記録するという役目が、阿求にはあるのだ。

その役目は今では八雲紫達が代筆という形で引き継いでいるらしい。妖怪が妖怪の記録を残しているような気はしないが、そういうことを引き受けるのは彼女達しかいなかった。

この部屋を出て、永遠亭を抜け出し竹林を超えた外からの情報は、今ではもう妹紅ぐらい

しか話してくれない。阿求はこうなってしまった自分を慰めるように妹紅の話に耳を傾け、妹紅の暮らしを記録する。

永遠亭の一室に閉じ込められたのは、阿求の体調が良くないためなのであるが、阿求としてはもう随分と調子が良いような気がしてならない。しかし、阿求の心身を管理する八意永琳や鈴仙・優曇華院・イナバは、首を縦に振らない。

どこがどう悪いのか尋ねると、どうやら頭の中が良くない状態らしい。

忘れるということができない阿求の頭は絶えず情報を集め、集めるがあまり重石となり、睡眠による記憶の整理も上手くできていないらしく、阿求の頭に異常をもたらしていると説明を受けた。

阿求としては全然そんなことはないのだが、永琳から何か記憶に不具合が生じていないかと問われると、いくつか思い浮かぶ。

不意に、記憶が重なり合う。人里を歩いている時、博麗神社へと続く長い階段を登っている時、妖怪と話している時、阿求の記憶は過去のいつかの記憶に繋がりがり、不可思議な場を作

り、現実だと認識させようとする。阿求自身の記憶でもあれば、阿求の記憶ではない大部分が忘れられたはずの御阿礼の子の記憶と混ざり合う。

昔の記憶と混ざり合った場合は、そのまま記憶され、時としては記録され、未来の阿求はその間違いを直すこともあれば正せないこともある。

永琳が言うには、現在という時間の認識が曖昧になっているとのこと。阿求自身はそう思わないのだが、食事の時にその曖昧な状態が顕著に訪れる。

屋敷で用意された食事や永遠亭で用意される食事が、記憶にある食事と重なり合い、目の前の食事がいつの食事なのか分からなくなる。

そういう日が多くなり、人里で良からぬ噂が立てられる前に、阿求の身は永遠亭へと移された。人里で流れた噂は精々、阿求の体調が良くなり、最近の阿求の様子は……という程度で、誰も阿求にかかるようになった。そう言われると、最近の阿求の様子は……という程度で、誰も阿求の頭の中まで覗き込むようなことはなかった。

いつ治るのか、いつ屋敷に戻ってくるのかと心配を口にするのは人里の人間程度で、優曇

華も永琳もそして阿求自身も、そのことは口にしなかった。勿論、妹紅も。

一度でも異常が見つかった頭の中は快復に向かうことはなく、緩やかに劣化していき、やがて死へと至る。そういうことを、全員が知っていたため、阿求が訊くことはなかったし、永琳は人里に戻れた際のことを話すこともなかった。ただ、劣化していく速さをいかに緩やかにしていくのか、ということばかり話した。

阿求の今後は、この小さな部屋の中で過ごすしかない。時が停まったような部屋の中で。窓の外はいつまでも竹が見え、時折運ばれる風だけが辛うじて、時の流れを教えてくれるかもしれない。しかしその風も、壁のように並ぶ竹により、阿求の部屋まで届くことは稀だった。そういう静止した時の中で、妹紅だけが外のことを話す存在として、阿求の前に姿を見せた。一方で、姿形の変わらない妹紅の姿は、阿求の感覚を錯覚させることもある。今、阿求の前に姿を見せている妹紅が、遠い昔に見聞きした妹紅のような気がする。あるいは、遠い過去にいた妹紅が突然姿を見せたような気がする。そんなふうに阿求の頭の中でだけ、全く違う妹紅の姿を組み立てしまう。

その妹紅が現実の妹紅であるかどうかは、阿求にしか分からない。阿求は粗相のないように沈黙を貫き、苦々しい沈黙が妹紅にも伝わったのか彼女も話し終えると沈黙に徹することが多い。

外を吹く風の音だけが、部屋へと流れ込んできた。

沈黙を迎えると阿求は決まって、人里のどこかで飼われる鳥のことを思い出していた。小さな鳥籠の中で飼われる鳥のことを……。

妹紅はどうして、外のことを話してくれるのだろうか。妹紅は知っているのだ。阿求がここから出られないということ。妹紅の話を聞く度に、阿求の胸の内にはある衝動が生まれる。ここを出て、記録したい。しかし、誰もそれを許すことはない。混ざり合った記憶は、阿求の足を彷徨わせ、時間の感覚を奪い、この書斎兼寝室へと帰さなくなる。

阿求の口の端から、嫉妬のような火が零れた。

「私は、もうここを出られませんよ」

妹紅は阿求の口から零れた火に気づいても、軽い調子だった。

「でもだからといって、諦める必要はないんじゃないの？」

「……そういうものですかね？」

「そういうものよ。明日には、この部屋の外、明後日には永遠亭の外……そういうふうになっているのよ」

いつまでも軽い調子の妹紅に腹立たしいものを覚えて、阿求はつい訊いてしまった。窓の向こうから忍び込んでくる風と同じように温度の低い声が、阿求の口から流れた。

「過去の私も、そうでしたか？」

妹紅は一瞬、目を見開いて、口を閉ざした。それから、

「こうなるのは、あなたが最初よ」

と顔を伏せて呟いた。

阿求はその答えに、二つの疑問を懐いた。

こうなるというのは阿求の頭の中のことを意味しているのだろうか。あるいは、こうして永遠亭で看取られるのは阿求が初めてということなのだろうか。

後者であることは、阿求の内に潜んでいる幾人もの記憶が証明しようとしていた。阿求がこれからどういう道を歩むのか、妹紅は知っているのだろうか。

「私はこれからどうなると思いますか？」

試しにそう訊くと、妹紅は涼しい顔で答えてくれる。

「そう悲観することないわよ。別に高熱に苦しんだり、食事が摂れなくなったりするわけじゃないんだから」

「そう分かりやすい病人になった方が幸せかもしれませんね」

「それはそれで苦しいわよ」

「他の方から見て普通の人と変わらない方が辛くありませんか？」

「そう？」

「……ええ、違います。妹紅さんが二重に見えたり見えなかったりします」

「二重に？ 目が悪くなっているってことかしら？」

「そういうわけじゃないんですがね……。頭の部分のような気がします」

阿求の記憶にいる妹紅と今ここにいる妹紅が重なり合っているのならば、妹紅がここに来ることが少なくなれば妹紅が二重に見えるようなこともなく、阿求の頭の中は落ち着くであろう。そういうことは、妹紅もそして阿求自身も気づいている。そうした方が、阿求の生きられる時間は一秒でも一分でも一日でも伸びるような気がする。

「だったら私が来ない方が良くかもしれないわね」

試すように薄く笑う妹紅の言葉は本音なのかもしれない。阿求はすぐに笑って拒んだ。

「それはそれで困ります。知ってますか妹紅さん、この生活、暇で暇で仕方ないんですよ？ 喋り相手の一人ぐらいいてもいいと思いませんか？」

妹紅は安心したかのように笑った。

もし妹紅がここを訪れなければ暇が全身を蝕み、ここにいないだろう。重なり合う妹紅を認識しながらも話し相手の一人や二人はいてほしい。

生きられる時間が長い方が良くのかもしれない。しかし、現在の時間の認識が曖昧になっている阿求が、生きられる時間を認識できるかどうか分からない。

妹紅の話が終わり、彼女は去った。

時は流れ、風が窓を揺らすこともあった。竹が揺れ、葉がさざめく。外の風はまだ、あの時のように冷たい。

短くなった陽の光は、阿求の所まで届くことはない。

分厚い羽織を着込んでも、隙間に風が染み渡る。

阿求の頭はまだ全然、時の流れを認識できていた。妹紅が訪れても、過去に全てを塗りつぶされることもない。ただ、現在が曖昧になる頻度は増えた。

生きているのだが、ただ生きているだけののような気がして、意識が残っている間に自身の生の全てを終わらせようと思える。頭の片隅にそんな考えがよぎることもある。

が、今の阿求の身の回りを支える誰もが、阿求を生かそうと手を尽くしてくれる。その善意が、阿求を苦しめる。

妹紅は、どうなのだろうか。妹紅は阿求を生かすために訪れているような気はしない。本当に生かす気ならば、妹紅はここに来ないだろう。妹紅の存在が、阿求の記憶を掻き乱し、

現実を曖昧に溶かすのだから。

妹紅は御阿礼の子の一生を見届けている一人であり、阿求の頭の片隅によぎる考えを相談されたことは、一度や二度ではないだろう。

妹紅が阿求の元に訪れた時、こういう願いを口にした。

「妹紅さん、買ってきてほしいものがあるんですが」

「何かしら？」

「睡眠薬を何錠か」

阿求の買い求めるものに、妹紅は当然といった調子で尋ね返す。

「永琳に頼めば、そこらへんは見繕ってくれるんじゃないの？」

「あの人じゃ、駄目なんです」

「……駄目？」

「もう起きることがない薬が欲しいんです」

「死にたいってこと？」

妹紅の確かめるような問いかけに、阿求は静かに、意を決して答えた。

「そうです」

妹紅は焦ることも慌てることもなく、そう、と呟いた。高い天井を仰いで、もう一度、そう、と呟いた。

阿求は妹紅の生の香りが漂う横顔を見上げて、彼女の背中を押すように言う。

「今も別の誰かが記録を続けていると聞きます。だから、それでいいんです。もう、それでいいんです」

妹紅は何も言わなかった。短い沈黙の後、妹紅は何かに縋るように問う。

「他じゃ、いけないからしら？」

妹紅の言葉は少なからず阿求に疑問を懐かせた。

「他……？」

「そういう……毒を呑む以外にも選択はあると思うのよ」

「縊死とかそういうことですか？」

「そうね。いけないかしら？」

阿求は室内を見渡したが、どこにも阿求を死にたらしめるものはなかった。あの梁には阿求の体重を支えるほどの強度はないように見える。妹紅に外から調達してもらうしか方法はない。

「何か良い方法があるんですか？」

「私だったら、上手く燃やせられるわ」

焼死が苦しいということを目にしたことがある。阿求はなるべく苦痛が伴わないものを選びたかった。

「……苦しくありませんか？」

「長生きしたお陰かしらね、加減が分かるようになっちゃったわ」

自嘲気味に言う妹紅に釣られるように、阿求も微笑を返した。

「妹紅さんは、苦しくありませんか？」

妹紅は驚いたように笑って、大きな声を上げた。

「そう訊くのは卑怯じゃない?」

「聞けなくなると思えますから」

「……準備とかあるから、少し待ってもらっていいかしら?」

「どれくらいでしょうか?」

妹紅は視線を窓の向こうへと投げた。竹林しか見えない窓の向こうへと。

「……何か外から持ってくるわ。その時に、全てを終わらせましょう」

そう言つて、妹紅は阿求の部屋から出て行つた。

阿求の部屋はいつまでも静かで、妹紅が訪れない。

阿求は妹紅と交わした約束を守るかのように、生き続けた。妹紅との約束は、阿求の頬に血の気を巡らせ、妹紅の横顔に感じた生の香りを自身の内に感じさせるものだった。皮肉のようだ、と阿求は自嘲を漏らすこともあった。

そんなある日、永遠亭に妹紅の足音が響き渡つた。静かだった歩みは途中で小走りになり、阿求の部屋の前で止まり、襖が開いた頃には全然落ち着いていた。

阿求の部屋へとやってきた妹紅は、黄色い水仙の花束を抱えていた。上品な香りが、阿求の部屋を満たした。

阿求は朗らかに笑って、妹紅を迎えた。

「春ですね」

妹紅の顔は朗らかに笑う阿求と違い、強張り、緊張を帯びていた。それでも、声は阿求を氣遣うように柔らかい。

「お待たせしちやっただかしら？」

「待ちました。でもいいんです。良いお花を、ありがとうございます」

阿求は妹紅から水仙の花束を受け取って、上品な香りに包まれ、恍惚そうに目を閉じた。

（了）

後書き

この度は、横光利一没後七五年・川端康成没後五〇年記念 東方新感覺派合同「今、再び」を手にとっていただき、誠にありがとうございます。

表紙を描いてくださったむへどるり氏に謝辞申し上げます。

何冊か合同誌を主催しておりますが、二人の作家を記念するのは今回が初めてのことでした。川端康成も横光利一も新感覺派と呼ばれる派閥に属していたこともあり、一冊の合同誌としてまとめたのですが、彼等が描きたかつた事や物や出来事は、きつと違つたと思います。そして彼等の書いた作品を読んで、何を思うかも、読者一人一人によつて全然違ふと思います。

それでも一冊の合同誌にまとめたのは、きつと、習わしがそうさせたのだと思います。

横光利一は、川端康成よりも早くに亡くなり、弔辞を読んだのは川端康成です。

——ここに君とも、まことに君とも、生と死とに別れる時に遭った。君を敬慕し哀惜する人々は、君のなきがらを前にして、僕に長生きせよと言う。

(略)

君の名に傍えて僕の名を呼ばれる習わしも、かえりみればすでに二十五年を超えた。君の作家生涯のほとんど最初から最後まで続いた。その年月、君は常に僕の心の無二の友人であったばかりではなく、菊池さんと共に僕の二人の恩人であった——

そういう次第でありますので、二人の友を記念して一冊の合同誌とさせていただきました。執筆者のモチーフ元につきましては、左記の通りです。

植物図鑑 日向と火にゆく彼女 (「掌の小説」著…川端康成)

こうず 春は馬車に乗って (横光利一)

ひととせ 眠れる美女 (川端康成)

豆腐屋 春景色（川端康成）

久我暁 琵琶湖（横光利一）

深紅香奈 笑われた子（横光利一）

七雲結人 春は馬車に乗って（横光利一）

涼名 十六歳の日記（川端康成）

近藤貴弥 春は馬車に乗って（横光利一）

二〇二二年九月中旬 近藤貴弥

横光利一没後75年・川端康成没後50年記念

とうほうしんかんかくは こうどう いま ふたた
東方新感覚派合同「今、再び」

2022年10月9日 初版

原作 東方Project（上海アリス幻楽団）

印刷 ちょ古っ都製本工房

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ
近藤貴弥（出藍文庫）

表紙絵 むへどるり（ぼどしゅやスタジオ）

ロゴデザイン 工藤雅弘

寄稿者

植物図鑑（園芸センター）

こうず

ひととせ（四季堂本舗）

豆腐屋（菜飯田楽）

久我暁（青猫幻想団）

深紅香奈（書棚裏の御稻荷様）

七雲結人（まほろば）

涼名（涼来来！）

※本書の無断転載・複製・販売等を禁じます。
